

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第27集

む な だ
牟 多 田 遺 跡

福岡市西区大字野方字牟多田

壱岐中学校造成地区調査報告

昭 和 49 年 3 月

福 岡 市 教 育 委 員 会

昭和49年3月

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第27集

福岡市西区大字野方字車多田 壱岐中学校造成地内調査報告

福岡市教育委員会

序

近年、土地開発の急激な進展により、埋蔵文化財の保護について、全国でさまざまの問題が生じております。福岡市においては、この解決のため、やむをえず消滅する遺跡については、事前の調査を実施し、後世の人々にわが郷土の歴史を伝えていくよう努力しています。

牟多田遺跡は、西区の学童増大に対処するため、昨年9月開校になった壱岐中学校の校庭内にあった遺跡でございます。本報告書が古き早良平野を知る、一資料として市民各位に御活用いただければ幸いです。

なお、調査に際して、有益な助言をいただいた調査指導員の先生方、炎天下作業を遂行された作業員の皆さん、および関係諸方面の方々の多大の御協力と文化財に対する深い御理解に深甚の意を表します。

昭和49年3月

福岡市教育委員会

教育長 正木利輔



目 次

1. 調査の契機と経過	1
2. 遺跡の環境と立地	2
I 自然環境	2
II 歴史的環境	3
III 遺跡の立地と周辺の遺跡	7
3. 調査の方法	10
4. 調査遺構	12
I 出土溝	12
II 杭列	15
III 小結	17
5. 出土遺物	19
I 繩文・弥生時代	19
II 古墳時代	22
III 歴史時代	27
IV 小結	28
6. 築前国早良郡家について	31
7. まとめ	35

図 版 目 次

図版 1 半多田遺跡と関連遺跡	
図版 2 1.溝 I (A 6、7区) と遺物出土状態	
2. 溝 I (A 6、7区) と遺物出土状態	
図版 3 1. 溝 I の断面と甕の出土状態	
2. 溝 I の甕の出土状態	
図版 4 1. 溝 5 (B 1、2区) の出土状態	
2. 溝 1、溝 4、溝 5 (B 2区) の出土状態	
図版 5 1. 溝 5 (B 1区) の出土状態	
2. 溝 1と溝 5 (B 1区) の出土状態	
図版 6 1. 溝 9 (A 22、23区) と杭列の状態	
2. 溝 9 (A 23区) の断面	

- 図版7 1. 杵列の出土状態（A 22区）
 2. 杵列の出土状態（A 22区）
- 図版8 1. 溝9と穴（B 4区）の出土状態
 2. 溝9と溝10と穴（B 4区）の出土状態
- 図版9 1. 夜臼・板付I式土器の口部と肩部
 2. 夜臼・板付I式土器の底部
- 図版10 図版10 夜臼式土器の口縁部
- 図版11 1. 溝5（B 1、2区）出土の土器
 2. 溝9と豊穴出土の土器
- 図版12 溝Iと溝6出土の土器
- 図版13 歴史時代の出土遺物
- 図版14 豊の肩部の拡大写真
- 図版15 野方中原遺跡の豊との対比

挿図目次

第1図	早良平野の土壤図	2
第2図	早良平野の地形と遺跡	5
第3図	遺跡周辺の地形と遺跡	7
第4図	発掘区設定図	10
第5図	発掘区配置図	11
第6図	溝の配置図(1)	12
第7図	遺構断面図(1)	13
第8図	溝の配置図(2)	14
第9図	遺構断面図(2)	14
第10図	溝の配置図(3)	16
第11図	遺構断面図(3)	16
第12図	杵列の配置図	16
第13図	縄文・弥生時代の遺物(1)	20
第14図	縄文・弥生時代の遺物(2)	21
第15図	弥生時代の遺物	22
第16図	古墳時代の遺物(1)	23
第17図	古墳時代の遺物(2)	24
第18図	古墳時代の遺物(3)	25

第19回 古墳・歴史時代の遺物 27

付 図 早良平野の古代地図（条里・都家）

表 1 夜臼式土器出土一覧表 21

表 2 ふいご羽口出土一覧表 26

例 言

1. 本書は福岡市立壱岐中学校の新築に先行し、福岡市教育委員会文化課が昭和48年度事業として実施した同校の造成地区内の埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査の報告と併せて、福岡市立歴史資料館長三島格氏の御尽力により、佐賀大学・日野尚志氏の論考を掲載し内容の充実をはかった。
3. 掲載図面の原図は松村道博（文化課）平川數治（別府大学）島津義昭が作成し、製図は島津がおこなった。
4. 遺跡写真は松村がおこない、遺物写真は小水博明氏（九州産業大学）が撮影をおこなった。
5. 本文中「筑前国早良郡家」の執筆は日野尚志氏、他は島津がおこなった。
6. 本書の編集は島津義昭がこれをおこなった。



1 調査の契機と経過

調査にいたるまで 昭和47年4月16日、建築計画課から、新築の予定の屯岐中学校、造成予定地である福岡市大字野方字牟多田 188番地外、約11,000m²に対する埋蔵文化財の有無のといあわせがあった。その地一帯が水田であり、稲の植えつけ期をすぎたばかりで、直接的な現地に立っての踏査ができぬまま、文化課は建築計画課に遺跡なしとの回答をおこなった。

学校の基礎工事は、当初の予定のまま実施に移ったが、その間、文化課では再度の分布調査等をおこなった。その結果、この地一帯が文献史学上、古代の「駅」址に比定されていること。さらに踏査で土師器片、スラッグなどが表採されたこと。また古く、中山平次郎博士によって発見された弥生式遺跡である野方、高木遺跡の近位置にあること、などから発掘調査の必要性が深く認識され、用地課とのうちあわせにより調査の実施となつた。

学校建築工事はすでに基礎工事の工程にはいっており、高さ2mに及ぶ水田の埋め立てがなされていった。調査区は、校庭の中央部を巾4m残して、ここを調査区とすることとなつた。

現地での発掘調査は6月1日から8月31日までおこなわれた。この間、下山門地区の皆さんをはじめ、諸関係者の尽大なる協力があつたことを特記しておきたい。また九州大学考古学研究室、福岡県文化課の諸氏の数度の来観があり、調査者に有益な助言を与えた。

調査の構成 発掘調査を実施するにあたっては、次のような体制を整えた。

〔現地調査員〕

島津義昭（市文化課） 松村道博（市文化課）

平川敬治（別府大学） 上斐崎麗子（現場事務）

〔福岡市教育委員会・文化課〕

清水義彦 三宅安吉 岩下拓二 福田征一

〔福岡市教育委員会・用地課〕

久我公一郎 中島正博 小西鉄太郎 柳良夫

藤本政義

なお昭和48年夏は、6月1日から中旬すぎまで、晴天がうち続き、このため早良平野の先端地区の村では、川の水かかりが悪く田植が著しく遅れた。ところが26日から突然降りはじめた雨は、逆に福岡市の低地帯に家屋浸水の多大な被害を与えた。

この集中的な豪雨のため、試掘坑に左右の埋め土がくずれおち、とくに上半を露出していたA区の杭列は、試掘坑の上面まで泥沼化して、残りの記録と遺物の取りあげを断念せざるをえなかつた。

2 遺跡の環境と立地

I. 早良平野の自然環境⁽¹⁾

福岡平野は東を三郡山地、南・西方向を背振山に限り、北方が博多湾にひらく。南方の山地からは多くの河川が海にそそぎ、西から室見川、樋井川、那珂川、御笠川、多々良川などの主要河川があり、上流域には河岸段丘、下流域では広大な冲積平野を形成する。また福岡平野内には60~100mの丘陵が散在し、平野内を小地域に画する。

ここ早良平野は、広義の福岡平野の最も西に位置する。平野の西は、背振山より北に分岐して長垂までつづく山塊に限られ、以西の糸島郡と境をなす。また東は、油山より続く平尾丘陵によって限られている。平野の形は、南北に主軸をもった扇形をなす。平野の奥にあたる南部は早良郡に属し、概して山地が多く標高は北に進むにつれて、除々に低下する。河川は東南

西の高地に源をもち、多くの支流をあわせ平野内を貫流する。うち室見川を最大河川とし、東より樋井川、名柄川、十郎川などの小河川がある。

室見川は、近世まで梅雨時の出水氾濫がたびかさなり、被害が甚しかったとつたえられる。⁽²⁾現在は改修工事により、堤防が完備している。市内の河川では唯一の清流のたたずまいをみせる。

平野内の地質は、西部の糸島郡と接する山塊、叶ヶ岳、飯盛山などは花崗岩からなり、そこから分岐し北東に延びる丘陵の谷あいに、小規模な、花崗岩ばいらん土による複合扇状地をつくる。他は、平野の奥に一部古牛層に属する石灰岩地帯がみられるが、大部分は室見川などにより形成された冲積層である。また平野の西、小田部、樋井川の流域にはわずかながら洪積層が分布している。

土壤は、大部分が砂質壤土であるが、前記の洪積層の分布する地帯では、地盤の影響をうけ、幾分粘質を帯びる。

このような自然条件は、そこに住む人間史に直接・間接的な影響を与えていている。



第1図 早良平野の土壤図(早良郡誌を改変)

砂土(第四紀) 新層	壤土(第四紀) 新層
堆土(第三紀層)	壤質(第四紀) 堆土(古層)
堆土(第四紀) 古層	砂質 地土(花崗岩)
堆土(秩父古生層)	砂質(第四紀) 壤土(新層)

II. 早良平野の歴史的環境（研究史と成果）

現在では、早良平野は行政上、福岡市と早良郡に分かれているが、これは從来單一郡であった旧早良郡の北半が昭和16年福岡市に編入したためである。平野内の遺跡の分布は、南部の平野の奥にあたる早良町は不明な点が多い。⁽³⁾ 1971年度に集計した福岡市教育委員会の地名表によれば、先土器・縄文時代15ヶ所・弥生時代44ヶ所、古墳時代 160ヶ所、歴史時代5ヶ所の遺跡が確認されており早良平野の原始・古代を知る一応の目安となる。

先土器・縄文時代 この期は他の福岡平野の遺跡と同じく、断片的な資料の出土で包含層は確認されていない。今後、平野の東西にわずかながら分布する洪積台地上の徹底的な調査がのぞまれる。

弥生時代 本格的調査は1966年以来、有田遺跡の発掘調査をはじめとして以後、次に拾六町遺跡群、1974年の野方中原遺跡の調査にいたるまで大規模な発掘調査が続きたま散在する資料の集成と報告がなされた。このため平野内の小地区ごとの発展の姿が、一応具体的に記述できるようになつた。⁽⁴⁾ 以下そのあらましを記す。詳細はそれぞれの報告を参照されたい。

早良平野の弥生遺跡は自然環境をもととする、地域的密集性を基準にする分類から①西新・藤崎地区②有田・小田部（さらに飯倉原をふくむ）地区③下隈・梅林・野芥地区④拾六町地区⑤金武・都地地区⑥早良郡地区⑦桶井川地区、などにグルーピングできる。これらのうち①②の地の内部にラグーンをいだく地区にまず弥生初頭の遺跡が登場し、前期終末には平野の北・南・東に占地の広がりがみられ、中心遺跡やその周辺には青銅器が出現する。弥生中期になると遺跡は平野内の全地区に遺跡がみられ、すべての住居可耕地の大半が占拠されるとともに、地域ごとの結集が進行する。さらに後期の実体は明確ではないが、中期の地域的な結集をそのまま継承発展させたような様相をしめす。しかし、早良平野の弥生期の遺跡には須玖遺跡や三重遺跡のように多量の前漢鏡や青銅利器を副葬し、平野（田）を代表するような強大な政治権力を示す遺跡はない。この理由を、下條氏は早良平野内の各小地区ごとに基礎をおく共同体には、その総括的な利益を代表するような地域首長は生まれたが、平野の全体を代表するものに転化しない、小地域共同体ごとの独立性に規定された政治的諸関係があつたと推定している。⁽⁵⁾

古墳時代 弥生時代のこのような政治的権力の未発達は、早良平野に前方後円墳がないという事実として継続するとみてよいだろう。平野の先端部、島状の独立丘の五島山古墳が知られている最も古式の古墳であろう。⁽⁶⁾ その場合でも墳丘は小円墳であり、主体部は箭式石棺という在地的な形を示していることが注意される。これに後続するものとしては、西新町藤崎古墳⁽⁷⁾、重留拌塚（火塚）古墳などがあげられる。

早良平野の古墳が、爆發的とでも形容できる量的増大をみせるのは後期古墳の時代で、概略6～7世紀に相当する。先述した古墳時代の遺跡の大部分は、直径10～15mの横穴式石室をも

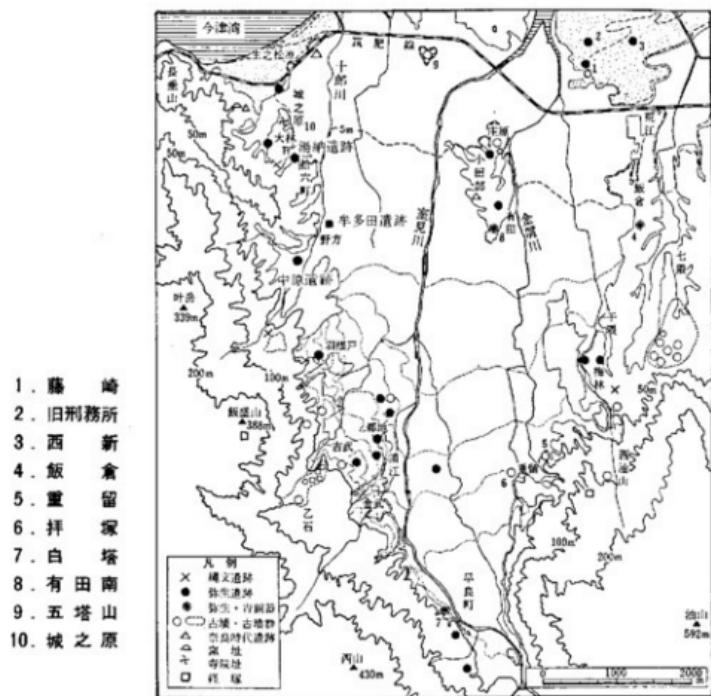
つ小円墳であり、平野の東西の山麓部、丘陵部に数基を単位として、数10基が密集している。さらに早良平野の北方、博多湾にうかぶ能古島にも10数基がみられる。早良のこの期の古墳群は、1つの文化圏の中で歴史的に形成されたということから、これらを「サワラ古墳群」と総称することができるという。この場合、サワラ古墳群は、自然地形によって7支群に分けられる。すなわち①愛宕山・小戸山支群②拾六町支群③羽根戸・野方支群④長石・乙石・萩原支群⑤車留支群⑥駄ヶ原支群⑦片江・七隈支群である。⁽⁹⁾ このうち、とくに調査が進んでいる片江・⁽¹⁰⁾ 七隈支群・駄ヶ原支群についてみると、とくに鉄製産と後期古墳の増大が密接な関係にあるらしいことが注意される。

このことが最初に知られたのは1969年調査の油山の南方の福岡市花畠・大牟田古墳群で、ここでは40余基の6～7世紀の後期古墳のうち、第7号墳の墳丘下の旧地表面に、タタラ炉⁽¹¹⁾ 2基を検出した。この場合、タタラ炉自体には年代の決め手がなかったが、上にのせる古墳の副葬品の形式よりみれば7世紀を降ることはありえない。

さらにこの鉄と古墳の結びつきは、駄ヶ原古墳支群のなかにふくまれる大谷古墳群でもみられた。大谷7号墳および51号墳などでは獨袖式の横穴式石室墳のなかにスラッグ多量が、ばらまいたように敷いてあった。またここでも古墳群の近位置に楕円形のたたら炉がみられた。油山東藏にあたる、片江・七隈支群、駄ヶ原支群の群形成の場所的な変化をみていくと、群中最も古式のものは、まず平野に突出した丘陵先端部に比較的盛土の大きい古墳があらわれる（七隈6号墳）。この古墳は玄室の平面が長方形をとる（Ⅰ期）。次に丘陵斜面に数基がまとまり築造される。そして単位をなす数基（単位群とよぶ）のなかには、古地条件によって内外構造の優劣がみられる（Ⅱ期）。古墳築造の最後のものは、斜面および谷奥の立地の悪悪などころに単独でつくられることが多い（Ⅲ期）。このように山麓低所から山の中腹へと移行していく傾向がみられるのである。出土の須恵器の形式から各期に年代をあたえれば、Ⅰ期が6世紀中葉、Ⅱ期が6世紀後半～7世紀前半、Ⅲ期が7世紀前半以降と整理できる。さらに立地上の特徴としてあげられるのは油山山麓の場合、Ⅲ期の最も新しい古墳でも、標高約200mを最高所とし、それをこえるものは知られていない。

このような、早良平野の東、油山山麓の姿が、西の拾六町支群、羽根戸、野方支群にもみられるかどうか。今後、支群をさらに分かつものとして考えられる、単位群ごとの正確な地図作りをさらに強化していかねばならない。

歴史時代 早良平野の古代史上の問題については後の日野尚志氏の論巧にくわしいが、最近調査された遺跡についてのべる。早良の最先端、砂丘内面に位置する下山門遺跡では、古墳時代～奈良時代、平安時代に及ぶ古道、製鉄址などを調査したが、遺物包含層の第IV層からは良好な越州窯の出土をみた。器種は碗と皿であるが、数個の完形品（接合して）をふくみ、とくに碗は、中山平次郎の北定された鴻臚館址とされている平和台出土のものに比べて遜色のない



第2図 早良平野の地形と遺跡（「有田道路」原図に加筆）

良好なものであった。さらに包含層の中から鉄釘や、礎石状の平石が出土し、布目瓦類の出土は、整理箱20個ほどにおいて、この地に有力な建物があったことが推定される。この推定から思いうかべられるのは城ノ原廃寺である。下山門遺跡から西南約1kmにあり、出土の瓦から奈良時代後半期から平安期に存続した寺院とみられる。下山門遺跡の建物はその付属設備であったこともまた考えられない推定ではない。さらに下山門遺跡では、条里施行時からほど遠くない時期とみられる、畦町杭列が発見され、その方向は文献上より推定されている早良平野の方向（N=10°W）と一致することが知られた。また、平野内の条里施行の北の限界を明らかにした。

鉄の問題 北九州の弥生時代研究の幕あけをされた中山平次郎博士は、また早良平野の鉄の問題をとりあげられた最初の人であろう。はやくも大正七年に、この問題に言及されている。

早良平野内の遺跡として、拾六町與納、高木、戸切、生松原、野方、梅林などをあげられている。このうち生松原は先述の下山門遺跡に相当し、ここでは4基の炉窯が発見された。発掘

区を拡張すれば、さらに多量の炉址の発見があると報告者は記している。時期は、自然攪乱のためはっきりとしなかった。また拾六町宮の前E地点は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての住居址群であるが、ここからも若干の鉄滓が発見されている。²⁵ 炉体は不明であった。近接する大又遺跡でも、第1号、4号住居址内から鉄滓が出土している。²⁶ これらの地区は、中山博士の指摘の場所と符合し、古く博士の示された卓見が追認されたわけである。このように平野内の多くにみられる鉄滓の出土は、たとえ炉体が確認されていなくても、その地で製鉄がおこなわれたことは疑いない。その開始期はいつであろうか。弥生期の製鉄については实体が不明であるが、宮ノ前E地点のものが、出土の土器と共に伴するものであれば、調査で知られた最も古い例となろう。さらに1971年調査の羽根戸・野方支群のなかに含まれる小松ヶ丘古墳群の一角でも、大平田7号墳の埴丘下から発見されたと同様の、楕円形の炉形をなすタタラが2基発見されている。土器の伴出はなかったが2号炉の木炭を資料とするC₁₄測定の結果、6世紀後半の測定値がでて、先述の大平田例と近似期のものであることが知られる。さらに奈良時代の例としては有田遺跡で、東西2.75m、南北2.50mの正方形隅丸の堅穴から、土師器、須恵器とともに、球状酸化鉄塊（スラッグとは異なる）が出土し、冶金学的分析より、砂鉄を原料としたものであることがわかり、これは製品化するまえの原材であるとされている。

このように、早良平野の歴史を考えるうえで、製鉄の問題は、重要な課題としてある。1973年発見の現在調査進行中にある野方中原遺跡は、弥生終末から古墳時代初頭期にかけての、発見されたかぎりでは北九州最大規模の集落遺跡であるが、遺跡の一部の発掘でもごく少数の石器とともに多量の鉄製品を出土し、この期の鉄使用が急速に普及していたことの一端を充分うかがうことができる。果して、これらの製品がこの地で作られたものであるのかどうか、野方中原遺跡の今後の調査は、それに対する回答の一端を示すに相違ない。あるいは著名的な『魏志』東夷伝弁辰の項「國は鉄を出す。韓、漢、倭みな從ってこれを取る」という記事に符合するのか誠に興味ある課題ではある。

III. 遺跡立地と周辺の遺跡

牟多田遺跡は、叶ヶ岳と飯盛山とにはさまれに谷間に形成された、北東にのびる複合扇状地の先端に位置する。しかし微地形的にみると、この小扇状地の一角には属さず、扇状地の先端から約100m北方の低地である。扇状地の先端は、長垂山から拾六町の入りくんだ谷あいを北に走る10m等高線がのる。10m等高線は橋本、戸切の間をぬい室見川を切り、北方に島状に延びる飯倉原にそって北に走り、その先端で反転し、さらに西方平尾丘陵に続いていく。牟多田遺跡の標高は7~8mをはかり、北東方向へしだいしだいに低くなっていく。遺跡の西方約50mには、飯盛山の谷ふところに源をもつ十郎川が北に流れる。博多湾まで約3kmの流域をもつこの川は、夏季には水が涸れ、主に梅雨期、出水期の流水路としての役割りを果すのみで、今日では積極的な役割りを果していないが、古代にはどうであったか。

遺跡と十郎川との間には、自然湧水のはげしい場所があり、現在養魚池として利用されている。小扇状地の下を流れる水脈の自噴である。現在の野方の集落は、扇状地根部にあり、土地はかわいでおり、遺跡一帯の低湿地と対照的である。この低湿地は、恐らく古代より居住地としては利用されることなかっただろう。小字名も、よく土地の状態をあらわしている。湿地は、



第3図 遺跡周辺の地形と遺跡 (25000分の1)

1牟多田遺跡 2満納遺跡 3宮の前丘地点 4中原遺跡 5有田遺跡 6鶴町遺跡

小森、福重まで続く。湿地は粗質グライ土壌をなし、秋落がひどく農業の生産性は低いとされる。

周辺の遺跡では北西方向に先述の弥生終末～古墳時代の大集落である野方中原遺跡がある。扇状地の中央部に位置する。直線距離で約500mの近距離である。また北西方向に、中原遺跡と同様の時期をふくみ、各期にわたる多彩な遺構、遺物を出土した拾六町湯納遺跡があり、直線距離で約900mをはかる。一方、牟多田遺跡より、東方の室見川までの間には遺跡の存在が全く知られていない。さらに室見川を切り、最初に位置するのは、弥生～古式土師を伴う、溝と杭列を検出した鶴町遺跡である。

このように牟多田遺跡は、早良平野中央部を東西に切った場合、最も低位置に存在する遺跡だといえよう。

註

- (1) 早良平野の地理・地誌を論述したものには次の文献がある。

土地分類図(福岡県) 経済企画庁総合開発局 1970

早良郡役所編『早良郡誌』1923

浦川英夫「福岡市付近の平田面の地誌学的研究」九州大学教養部地学研究報告 8 1962

- (2) 室見川は明治24、28、29年に水害をだし、その被害は少くなかった。明治32年より6ヶ月年の長期を費し明治38年に今日みる室見川の基本的な防災工事が完了した。

早良郡役所編『早良郡誌』1923

- (3) 福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表(総集編)』福岡市教育委員会 1971

- (4) 最近6ヶ月間の報告書としては次の文献がある。

九州大学文学部考古学研究室編『有田遺跡』福岡市教育委員会 1968

浜田信也編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 福岡県教育委員会 1970

柳田康雄編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会 1971

下條信行・沢臣臣編『宮の前遺跡(A～D地点)』福岡県労働者住宅生活協同組合 1971

栗原和彦・上野精志編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集 福岡県教育委員会 1973

山崎純男編『下山門遺跡』福岡市教育委員会 1973

- (5) 下條信行「弥生時代の早良平野」「宮の前遺跡(A～D地点)」所収 福岡県労働者住宅生活協同組合 1971

- (6) 下條信行「五島山古墳」「有田遺跡」所収 福岡市教育委員会 1968

龜井明徳「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」九州考古学38 1970

- (7) 藤崎古墳の年代の位置付けは龜井明徳「古墳時代の早良平野」「宮の前遺跡(A～D地点)」所収 福岡県労働者住宅生活協同組合 1971に依る。

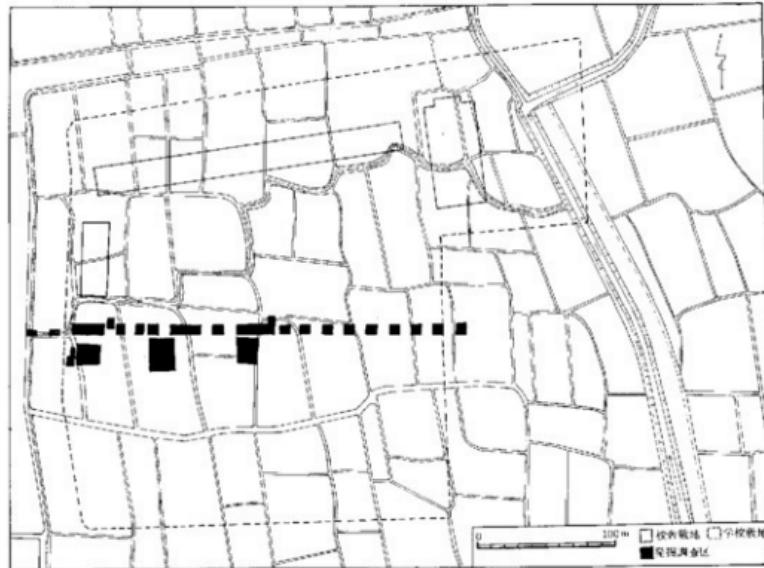
- (8) 註(7)に同じ。
- (9) この支群の分類も註(7)の亀井明徳氏に依る。
- (10) 1969～1970年に調査、報告書未刊。
- (11) 三島格「福岡平野の製鉄遺跡」和白遺跡群 所収 福岡市教育委員会 1971
- (12) 緒方勉編「大谷古墳群 I」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第19集 福岡市教育委員会 1972
- (13) 福岡市教育委員会編「福岡市埋蔵文化財地名表 第2集」福岡市教育委員会 1970
- (14) 後期群集墳のこのような立地上の変遷については、福岡平野の東邊部上和白地帯でもみられた。
- 塙屋勝利・島津義昭「古墳の年代と群の構成」「和白遺跡群」所収 福岡市教育委員会 1971
- (15) 山崎純男編「下山門遺跡」註4 参照
- (16) 佐田茂「城の原廃寺」有田遺跡 所収 福岡市教育委員会 1968
- (17) 島津義昭「下山門遺跡の条里製造構」「下山門遺跡」所収
- (18) 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時中間時代の遺物について」(1)(2) 考古学雑誌
7-10. 11 1918
中山平次郎「鉄滓を出す弥生式遺跡」歴史地理31-1 1918
- (19) 山崎純男「遺構各説(製鉄遺構)」「下山門遺跡」所収
- (20) 酒井仁夫「宮の前遺跡E地点」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 所収 福岡県教育委員会 1970
- (21) 則島邦弘「大又遺跡」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 所収福岡県教育委員会 1970
- (22) KUR I 0041 A.D. 577±14 この値は三島格「福岡平野の製鉄遺跡」「和白遺跡群」所収福岡市教育委員会 1971に紹介されている。
- (23) 坂田武彦・岡崎敬「有田遺跡発見の球状酸化鉄の冶金学的分析」「有田遺跡」所収 福岡市教育委員会 1968
- (24) 約20,000m²におよぶ広範囲の包含層があり、1973年度調査した約 5,000m²では弥生終末～古墳初頭の住居址(94軒)、周溝(A溝一直径約 100m、B溝直径約30m)などが発見され、未発掘地にはさらに多数の遺構が存在するとみられる。
- 柳川純孝編「野方中原遺跡一昭和48年度調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第30集 福岡市教育委員会 1974
- (25) 1971～1973年 福岡県教育委員会調査 栗原和彦氏より教示。
- (26) 1973～1974年 福岡市教育委員会調査 目下観意整理中。力武卓治氏より教示。

3. 調査の方法

発掘区の設定と名称 発掘区は校庭予定地中央部の埋めたてがなされていない地区に東西主軸をもつ $4 \times 4\text{ m}$ の発掘坑を40ヶ所設定した。発掘坑の名称は西端を基点として1~40と呼ぶこととし、西端から1つ起きに掘り進んだ。発掘坑は地山とみられる黒色土上面まで下げ、遺構を検出した区については、それを東西それぞれに拡張した。

当初は予想していなかった溝があらわれたので、その延び方を知るため、既設定試掘坑の南の部分4ヶ所を拡張した。この拡張区は、最初から旧水田面が残してあった東西列と違って、高さ2.5mの盛土があるため、堆土には機械力を投入した。

先の発掘坑と、南に拡張したものを区別するため、前者をA、後者をBと呼びわけた。そしてBの拡張区も西より順に1~4と呼ぶ。この場合、A列と違いB区の1区ごとの広さはまちまちとなった。



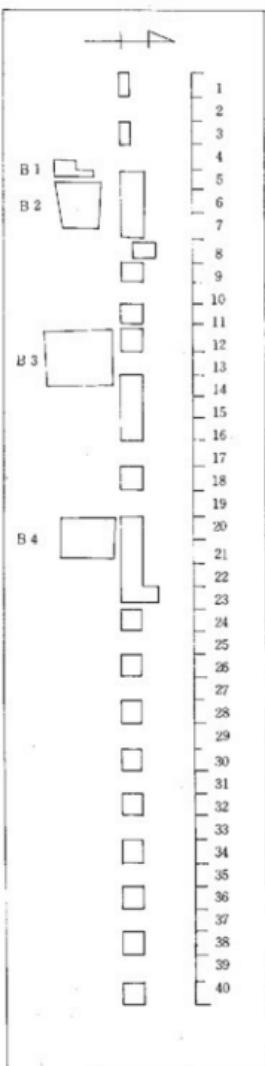
第4図 発掘区設定図

後述するようにA区に5ヶ所、B区に6ヶ所の溝を検出した。明らかに同一溝の延長とみられるものもある。

さらに、A 22区の溝9の中央区に杭列を多数検出したが、先述したように配置状態と、上半部の実測をした後に、左右の高さ2m余の埋め立てによる盛土が、発掘坑の内にながれ込み、杭の取り上げが不可能となった。流入の原因は、6月26日の集中豪雨により盛土がゆるんだためであったが、その責任は、そのような事態を配慮しなかった調査者に帰されるべきであろう。前もって4章「IV 杭列」の記述が不充分の由をおことわりしておく。

出土遺物の処理 出土遺物は水洗ののち、出土区名称と層位を注記し、現在、福岡市教育委員会が保管する。また自然科学的検査を要する、自然遺物については、今回の報告には所収できなかったが、それぞれ分析を依頼しており、後日その報告の任を果したいと思う。

発掘区の土層 断面の観察によれば地山の黒色の粘質土まで6層にわけられる。1層は1973年度の埋め土、2、3層は旧水田土で3層は鉄分集積層である。4、5層が遺物包含層である。4層は褐色の小角礫をふくむ砂質土、5層は砂層であり、4層よりじょじょに砂が大きくなっていく。遺構内の土は砂とビート質の黒色である。テストピットをもうけ黒色土をさらに掘り下げるに、下は青灰色の砂質であった、次章からの土層断面図では以上のような土序を数字で表記した。



第5図 発掘区配置図

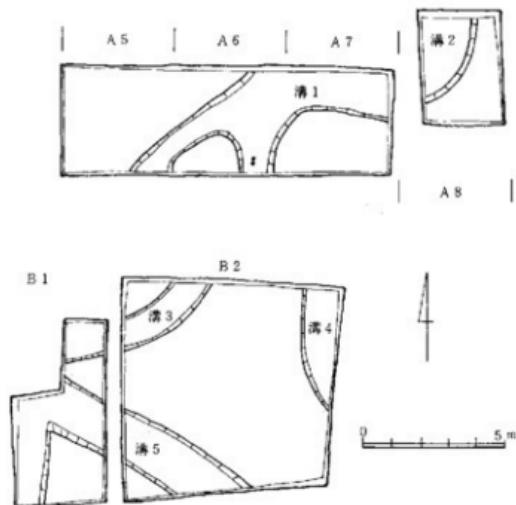
4. 遺構の調査

I. 出土溝

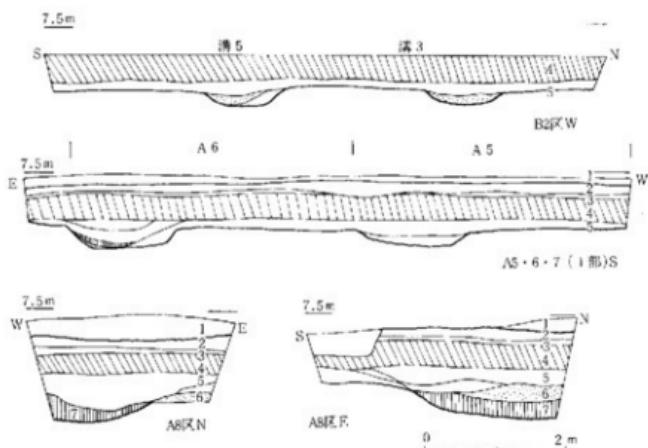
溝1～溝5（第6図） A5区とA7区を掘り下げ中、5層下部に溝状の落ち込みが認められたので、A6区、A8区を掘り下げた。結局は同一の溝であった（溝1、溝2）

またB1区、B2区にも、それぞれ5ヶ所の溝を検出した。B区で発見した溝のうち溝3は明らかにA区の溝1、溝2と同一である。したがって、以下これを溝1と呼ぶこととする。

溝1は、全体の主軸を北東に置くが、A6区で西方向に一支溝が分岐する。またA8区で北方向にややまがる。溝は第5層下面を上端として黒色土の中に掘り込まれているが、場所によっては、黒色土下の青灰色砂層まで達するところもある。溝断面形は形のくずれた逆台形状をなすが、場所によって一定しない。また北へいくにしたがって、掘り込みが深くなっている。B1区、B2区、およびA7区の半ばまでは、溝の底面高は、ほぼ同高である（標高約6.60m）。A7区、A8区では溝底は低くない（標高約6.0m）。下部に、ピート化した黒色土がみられる。溝内の砂には部分的に少量の黒色有機物がみられた。A6区の東の溝底に完形の甕1個、半分のみの甕1個がまとまって出土、近くから小形丸底壺の完形品が出上した。これらの土器は



第6図 溝の配置図 (1)



第7図 造構断面図 (1)

完品であるうえ、土器の状態から流転したともみられず原位置を動いていないと考える。

しかし、溝内からは、これら土器ばかりでなく、夜白式の高环形土器の脚部、變形土器の破片も、ほぼ同じ高さで出土したことにも注意しておきたい。他にはB2区の溝の中央部で、土器のごく少破片が一片出土したのみで皆無といってよい。A8区からも人工遺物は出土していない。

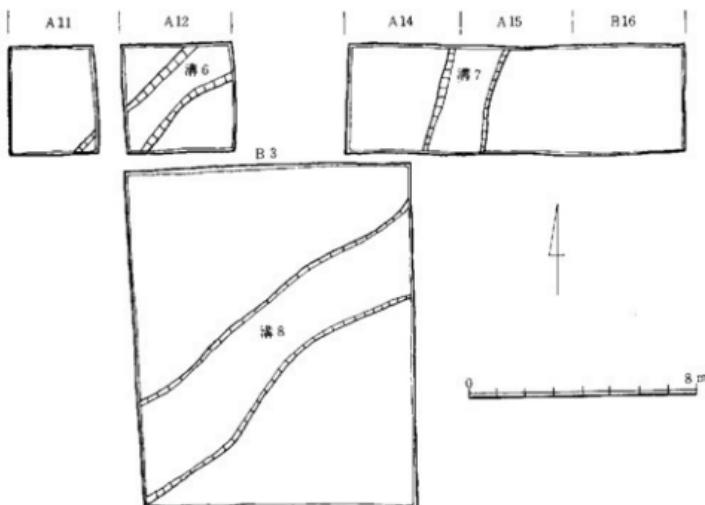
溝5は、溝1より巾広（巾約2m）で、溝底高もわずかに深い。底面はほぼ水平で、溝の方向は北西を示す（標高6.45m）。B2区で、南北に延びる溝と合致したが、両溝の間には、切り合い関係が知られるような土層の変化は認められなかった。溝内の土層状態は溝1と同様であった。

遺物は溝の中～下部より、甕、小形壺を中心とする土器の小破片が多量出土した。

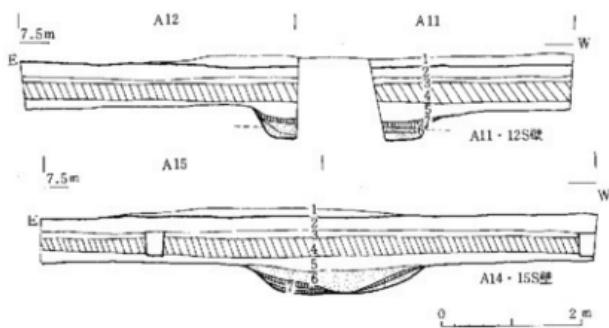
溝4はB2区の東端に一部分が検出されたのみで溝巾は不明であるが西方向に曲っていくらしい。人工遺物は皆無であったが溝の上端が5層中にみられ、他の溝と同時期のものと思われる。

溝6～溝8 (第7図) A11区とA15区を掘り下げ中、5層下部に溝状の落ち込みがみられたのでA12区、14区を掘り下げた。またA13区にもA14区、15区の溝の延長があった（溝8）。以下この溝日と呼ぶ。

溝6は主軸を北西方向に置き、断面形は逆台形状をなす。A12区の東隅の部分で溝の端がやや開き気味になる。溝底は黒色土より下の青灰色沙層まで達しているので、溝中に堆積した沙層との区別がつきにくかった。溝の上半部にはピート化しつつある黒色土が8cmの厚さでみら



第8図 溝の配置図 (2)



第9図 遺構断面図 (2)

れた。溝内からは、甕、小形丸底壺などの小破片が出土した。溝底は、ほぼ水平で標高約 6.3m を計る。

溝IIは、断面の土層関係は溝6と同様であるが遺物は皆無であった。溝の断面形は半月形をなし、巾 2.0~3.7m。溝標高は B 3 区の南隅で 6.30m を計る。溝内は上半部は砂層、下半部はビート状の黒色土で、砂層の上面に流木がみられた。断面形が巾広である点や、遺物が皆無である点から河道であると思われた。その場合、断面中にみられるビート状の黒色土の状態から、水はあっても流れていなかったことを想定できる。

溝9~溝10、竪穴（第10図） A 21区を掘り下げ中、5 層下部に溝状の落ち込みが認められたのでこれを溝9とし、A 22区に掘り進んだ。また B 4 区にも溝9の延長はみられた。他に竪穴と溝10がみつかった。

溝9は A 22区で南北に延びる溝と合致するが、切り合い関係は認められなかった。北東に走る溝は断面が半月形をなし、巾 1.0m を計る。A 22区の溝も同じく半月形をなす。溝底は A 23 区では北東から南西方向へ、じょじょに低くなっている。また B 3 区、A 21区の地点では逆に南西から北東方向へゆるやかに低くなっていく。A 22区の南北方向の溝底が溝全体では最も低くなってしまっており（標高 5.60m）、この部分はとくにビート層がよく発達している。この A 22区南北溝は東西の分岐する溝から水を集めの役割をもったものであろうと考える。

溝内からは、甕を中心とする土師器が出土しているが、特定の場所にかたまっているというような状態はなかった。

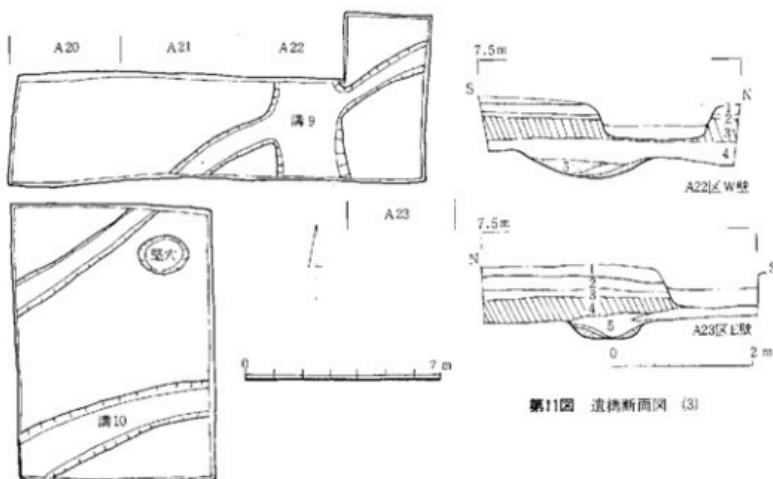
溝10は、B 4 区の南半部にあり大略東西方に延びる。やや南へ彎曲気味。溝の断面形は半月形。溝巾は西側で巾広くなり 2.10cm、東で約 1.17cm。溝の上端は第 5 層中にあるが、溝中は細砂のみで、人工遺物の出土はなかった。河道である可能性もある。

竪穴は、B 4 区の溝9の東側にあり、東西に長い梢円形をなす。上面で巾は 1.85m × 1.38m を計る。およそ 20cm ののりをもち断面形は深い皿状をなす。切り込み面は 4 層中からで、上端より底まで 42cm を計り、底の標高 5.0m。溝内からは土師器の破片が少量出土した。

II 杭 列

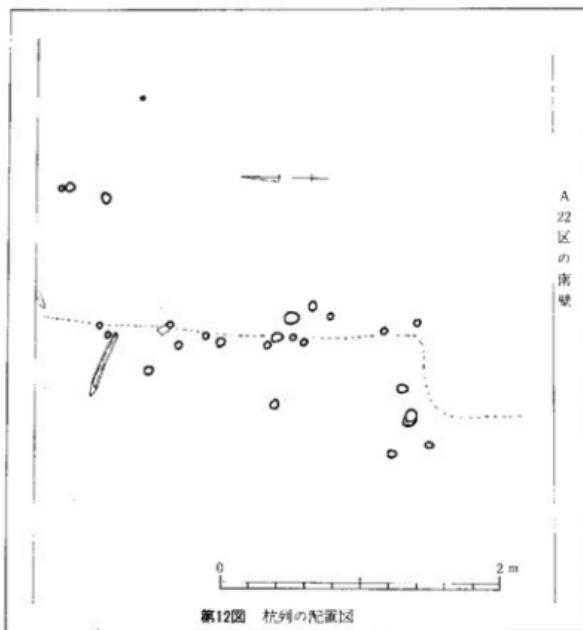
A 22区の南北に延びる溝の中央部に直立した杭群がみられた。杭の頭は第 5 層中にみられ、下半は黒色土の下の青灰色土に達している。杭の总数は 27 本を数え、うち一本のみ横倒した状態であった。杭は 1 本のみ面とりをした他の樹皮を残したものとされている。先端部の状態がどのようであるか確認できなかったが、横倒しになっているものは、先端より 15cm が鋭利な道具で両端よりするどく削り出されている。

黒色土下の青灰色砂層は緻密で非常に固いので、他の立杭に関しても先端部を削り出さなければ



第10図 槽の位置図 (3)

第11図 遺構断面図 (3)



第12図 杭列の配置図

れば、打ち込みは不可能であったろうと思われた。

立杭の分布は、全体としては南北方向に主軸を置き、南東方向へ延びる溝と、だいたい直交の関係を示す。また、直立した杭間を横に渡すようなものはなかった。

III. 小 結

以上、検出した遺構の状態を述べたが、発掘面積は少なく、溝の全体の関連をつかむことはできなかった。

検出した遺構を整理すると、溝は①遺物が出土することや土層の状態から人工溝とみられるもの（溝1、溝5、溝6、溝9）。②河道とみられるもの（溝II）。③いずれか不明なもの（溝4、溝10）にわけることができる。さらに溝内は、かって水が流れた、あるいは溜っていたのは溝内のビート状の黒色土や大部分が砂であることからみて疑いない。溝の方向を見ると人工溝とみられるものは主軸が南西から北東に延びるものが多いことに気づく。先に想定したように溝に水があった状態を考え併せると、この方向はこの地一帯のコンタの傾斜方向と同一であり、それを勘案したうえで掘られた溝といえないではない。したがって溝5のようにB1区の南北に延びる溝に対して、南東から交わる溝は、溝Iや溝6とは違い、むしろ水を取り入れる働きをもった溝と考えができるかもしれない。また、溝9のA23区の部分は溝底の傾斜が明らかにコンタの高低とは逆になっているが、この場合でもA23区の南北に主軸をもつ溝に集合し北へ流れるものと考えることができる。発掘区内で検出した限りでは溝底が、ほとんど高低差を示さないものでも先述したように地盤全体が、南西から北東に向って低くなっているので、溝の水はこの方向に流れたものと考えてよからう。溝内からは破片ではあるが、少なからず上部器が出土し、器種としては、甕、壺を中心とする。包含層（5、6層）が砂質土壤であるので流転して溝内に落ち込んだとも考えられないではないが、しかしA6区の溝Iで溝底より出土した壺の完形品1個と甕の上半部分、および小形丸底壺1個は明らかに、そこに置かれたもののようにみえた。そうだとすれば果してどのような理由によるものか。A12区の溝6からの出土土器には、小型の異形土器もあり、このような土器の使用法が知れる例がふえれば、溝の性格を知る鍵となると思われるが、これは今後にききなければならない。

A22区の杭群は直立しており、杭間を横に結ぶものは何ら検出できなかつたが、先述のように、この部分に出口をもつ溝の出口にあたることを併わせ考えると、この杭の役割りは、水の滞水を行なう。いわゆる「しがらみ」と考えられるのではなかろうか。その場合、横に仕切るのは必ずしも、板などの強固なものに限ることはなく、木の枝や草、わらたばでも充分用をなすことは、最近まで農村のいたる所でみられた風景であった。

さらに、溝の機能していた時期を考えれば、①溝の上端面が、いずれも5層中にあること。

②溝内から出土した土師器が流入の可能性はあるにしろ、ほぼ同じ時代のものと考えられるところなどから、溝はほぼ同期のものであると考える。このことは重要な意味をもつといえよう。すなわち、この溝の全体のつながりは、明らかにしえなかつたが、排水または保水の機能をもつたことは先述のとおりであり、さらに溝が5層より上には全くみられなかつたことと併せ考えるならば、早良平野の沖積面低湿地への進出の具体例として、牟多田遺跡の溝を評価することができると考えるからである。

5 出 土 遺 物

出土遺物 試掘坑から出土した遺物は縄文期のものから近世のものまで含むが、各時代ごとのうちわけは次のとおりである。

縄文式土器（夜臼式）破片71個	弥生式土器破片……………11個
土師器破片…………約2,500個	土師器完形品……………2個
須恵器破片…………約250個	陶磁器破片……………35個
フイゴ羽口破片…………9個	布目瓦破片……………2個
投弾形土製品…………1個	石庖丁破片……………1個
黒耀石片……………8個	丸木杭……………26本
スラッグ……………3.75kg	炉壁破片……………2個

以上のように、遺物としては、土師器が大部分をしめる。このほとんどが、前述の溝内から出土したものであった。しかし少破片の遺物が多く、図化出来るものの量はかならずしも多くはない。

以下、時代ごとに出土遺物を紹介する。

I. 縄文・弥生時代の遺物

夜臼・板付1土器（第13図）出土の場所は、表1のとおりである。出土土器では、彫形土器がほとんどを占める。それ以外のものは、壺形土器の口縁部、高坏形土器脚部がそれぞれ一個出土しただけであった。

彫形土器の口縁部は一条、および二条の突帯をもつものと、それがなく上面に刻み目をもつものとがある。胎土は1~2mm前後の石英粒が多くみられる。色調は褐色をなす。第13図(2)~(4)、(12)~(14)は、口縁部直下に粘土帶をはりつけ、それを連続的に指頭でおさえ凸凹をつけ、その上をヘラ状具で右から左にかたむき気味の斜めの刻み目を入れている（拓本にはでない）。

また(3)のように、指頭状のおさえがなく、そのまま刻みを入れているものもある。(12)はややふくらむ肩が残っているが、肩より下は二次的に火を強くうけたらしく表面は赤褐色化している。

(1)~(7)は、突帯をもたないもので、口唇部に刻み目をもつ。そのため(7)のように、口唇部がやや外反するものもある。表裏の調整は突帯をもつものと同じ。

(5)、(6)は、口唇部とその下に二条の突帯がみられる。ともに磨滅していく作り方を明瞭に観察しがたい。(5)には刻み目があるのかどうかよくわからない。口唇端は、つまんで肥大させていくようにみえる。(6)の下の突帯は豆状にした粘土を貼りつけて突帯としているようにもみえる。

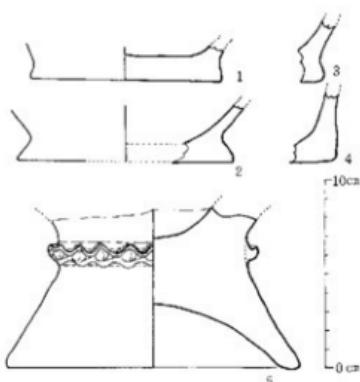


第13図 縄文・弥生時代の遺物 (1)

0 10m

	口縁部	底部	腹部	合計	備考
A 1	-	-	2	2	
A 3	5	2	42	49	
A 5	2	2	-	4	
A 6	2	-	-	-	他に高环形土器の脚部あり
A 8	-	1	-	1	
A 15	1	1	-	2	
A 21	-	-	1	1	
B 1	1	2	1	4	口縁部は壺形土器
B 2	2	1	-	3	
B 3	1	1	-	2	
B 4	2	2	-	4	口縁部に板付 I式を含む
	16	12	46	74	統計 75個

表1 突白・板付式土器出土品一覧表



第14図 縄文・弥生時代の遺物 (2)

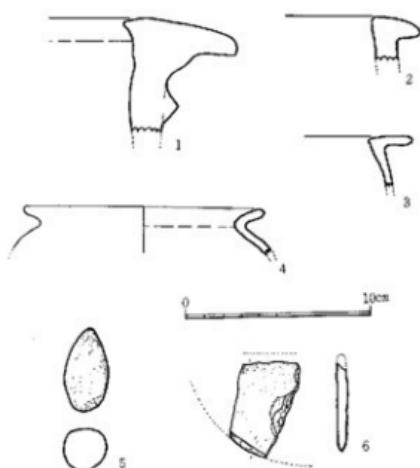
(6)、(7)は壺形土器の肩部であろう。(8)は表裏に横位の荒い条痕がみられるが、(9)にはそれがなく平滑である。ともに粘土帶を貼りつけて突帯としているが、(10)は押圧したうえに刻み目をもつ。(11)には押圧はない。

(8)は、壺形土器の口縁部。器壁は薄い。口唇部で強く外反する。磨滅が著しいが、口唇端には刻み目があるように見える。

(9)は壺形土器の口縁部。腹に比べ、表裏の調製はていねいである。月色の付着はみられない。底部(第14図1~4)(2)のように、円盤貼りつけの端部が、極度に外にはりだすものがありこれは壺形土器の底部であろう。

他は壺形土器の底部で、上記の他の部分と著しい相違はない。

高環形土器(第14図5)は上部を欠失し、脚部のみ。脚の上部に、壺の口縁部と同様の断面



第15図 弓生時代の遺物

三角形の突帯をもつ。石英粒を多く含み、灰褐色を呈す。現存高 6.7cm をはかる。

弥生式土器 (第15図 1~4)

T字形断面をもつ、横形土器 (1~3) と、〈字形断面をもつ小形壺上半部の破片である。裏も壺も表面は磨滅している。

投擲形土製品 (第15図 5)

中ぶくらみの橢円形をなし、断面は円形をなす。黒褐色を呈し、重さは 21.5g をはかる。B 4 区溝 9 内で発見。

石庖丁破片 (第15図 6)

刃をもつ。背の両端部を欠失し

て、旧状はうかがえない。全面、磨減しているが、刃部と体部には、製作時の研磨痕がみられる。灰色をなす硬砂質。上記の上器に伴うものか。B 4 区 4 層出土。

II 古墳時代の遺物

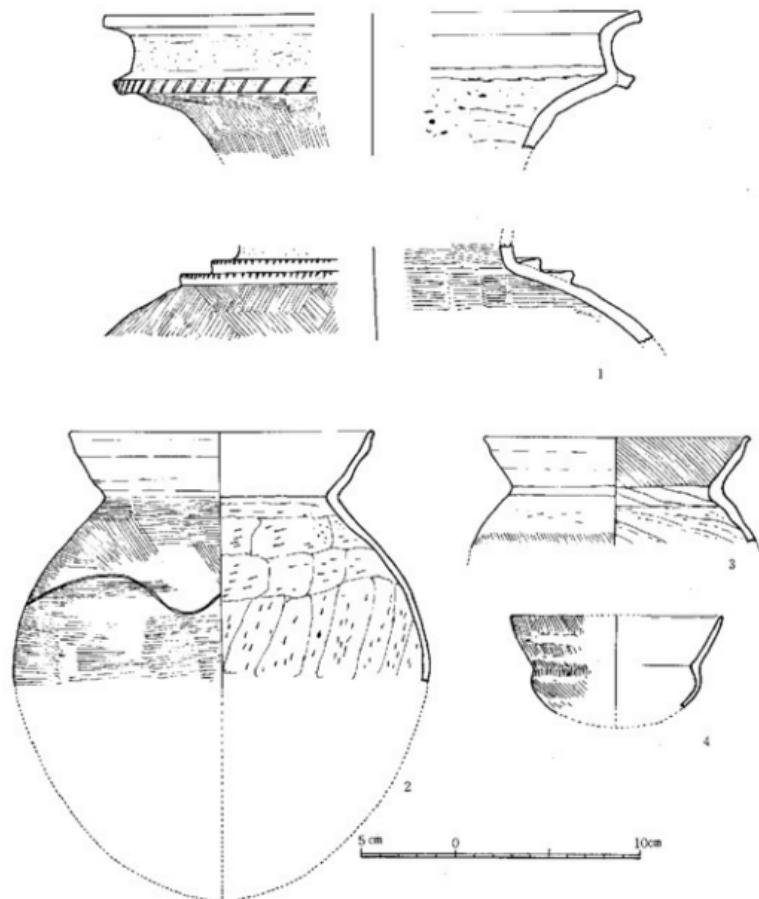
溝3出土の土器 (第16図) 壺を中心とする土器片が出土したが、図化できるものは少ない。(1)は壺の口縁部と、肩部で、それぞれ 3 分の 1 程度がのこる。同一の個体であるが、接合面はないので、別々に図化した。

口縁部は、二重口縁をなし、頸の上部分に貼りつけ突帯をもち、表面には斜行刻み目をもつ。突帯の部分から立ち、途中から強く反転する。突帯より下には荒い刷毛目がみられる。肩部には貼りつけの断面三角形の突帯を二重にめぐらし、突帯には斜行の刻みを入れる。表裏には、荒い刷毛目の整形がみられる。この場合、刷毛目は、突帯の下にもみられ、突帯の貼りつけより先行したことが知られる。胎土には、石英粒が多くみられ、全面、褐色をなす。復原口径 28.6 cm をはかる。

(2)~(3)は壺である。ともに 4 分の 1 程度が現存する。口縁部はく字形をなすが、口唇部の近くでやや肥大する。口唇部は水平であるが端正ではない。表面には口縁部より下方に刷毛目がみられるが、非常に浅い。肩部では横位、より下は縦位の方向である。(2)の内面にはへら状具によるけずりが明瞭にみられ、口縁との接合部あたりでは、左から右へ横方向に石英粒が

うごき、下は底部方向から上の部分に石英粒の移動がみられ、削りの方向が知れる。さらに肩の部分の表面に巾1mmほどの浅い沈線一条が波状にめぐる。

(4)は3分の1程度がのこる。いわゆる小形丸底壺である。表面に刷毛目をみるが、ところどころ、その上からなでて消されている。表面より内面の方がよく研磨され平滑である。全面、黒色をなし、焼成は良好。復原口径11.4cm、高さ約6cmをはかる。



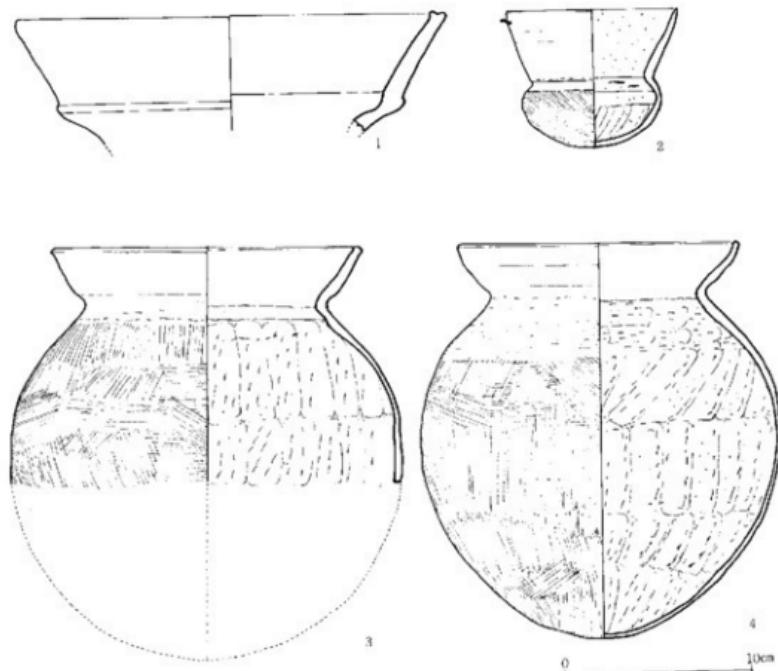
第16図 古墳時代の遺物 (1)

溝Ⅰ出土の土器（第17図） (1)は壺の口縁部で3分の1がのこる。いわゆる二重口縁をなす。口唇面は平坦であるが、中央の浅いくぼみが全周する。表裏面よくなじて整形する。全面、褐色をなす。復原口径22.8cmをはかる。

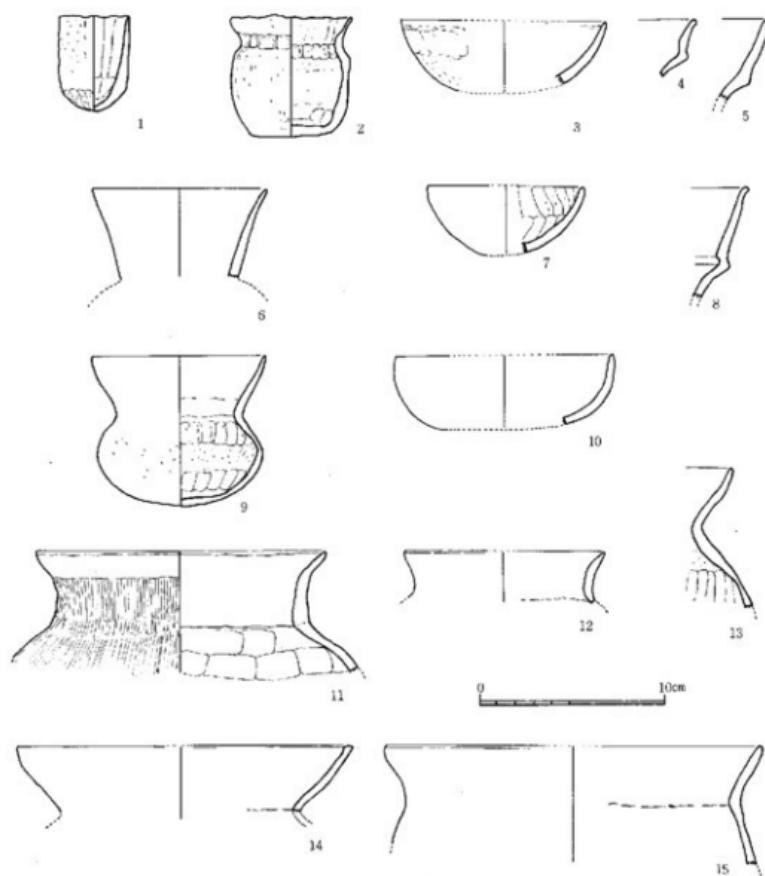
(2)は、小形丸底壺の完形品で、体部表面の全面に細く浅い刷毛目がみられる。口縁部と体部の接合面はよくなじられ、そのため肩部がやや段をなす。色は黄褐色で、一部黒色部がみられ、焼成はよくない。器高7.5cm、口縁径9.2cmをはかる。

(3)、(4)は壺で、(3)は上半部のみ、(4)は完形品である。ともに、同地点から近接して出土したもので、製作法、器形はよく似ている。ともに口縁部はく字をなすが、口唇部に近い部分で肥大する。口唇部はやや丸味をおびる。口縁部と肩には横のなで跡がみられる。肩部はふくらみに欠ける。肩から底部まで、細く浅い刷毛目がみられる。肩の部分の刷毛目は巾3cmほどが横方向に施され、それより下の縱方向の刷毛目は、横方向より後に施されたことが刷毛の切り合ひ関係より知れる。

内面のヘラ削りは、底部からはじまり内側の全面にみられるが、それぞれ方向が違う。内面



第17図 古墳時代の遺物 (2)



第18図 古墳時代の遺物 (3)

の底部のまわりには指圧がよく残っている。ともに最大径を胴部の中央部におく。(3)は丸底をなすと思われる。器壁は非常にうすく3mmをはかるところもある。(3)の方がわずかに大きい。(3)は、口径16.0cm、胸部最大径21.0cm、復原高約22cm。(4)は口径14.8cm、胸部最大径19.2cm、器高21.0cmをはかる。(3)は焼成は不良で赤色をなしもろい。(4)は暗褐色をなし、肩部以下に、黒色のススが付着する。

溝9と豊穴出土の土器（第18図）

壺には小形のもの（6、9）といわゆる二重口縁（4、5、8）がある。（6）は口縁部3分の1が現存。（9）は完形品である。（9）はほぼ胸部の最大径と同大である。胴部器面はへら削りのあとをなでている。内面には指による整形のあとがのこる。（6）は復原口径9.4cm、（9）は復原口径

9.3cm。器高 8.0cmをはかる。ともに褐色をなす。

(4)、(8)は、屈折部より上の長短の違いはあるが、作り方は共通する。ともに、口唇端が肥大しややふくらむ。また屈折部の内面はていねいになでられ、浅い溝状をなす。(5)は、やや内反気味である。(4)、(5)、(8)とも黄褐色をなし、焼成はよくない。

深鉢形上器(3、7、10)は、4分1程度が現存するが、内外面ともへら削りの後、よく研磨されて平滑である。復原口径10.8cm(3) 8.4cm(7) 11.6cm(10)をはかる。褐色をなし、焼成はよい。

表は、口縁部が外反するもの(11、12、15)と内反するもの(13、14)がある。11は内面に横位のへら削りがみられる。器表は荒い刷毛目。復原口径15.4cm、黒褐色をなす。12は口唇端が細くのびる。褐色をなす。復原口径10.8cm。(13)、(14)は、溝Ⅰ出土の完形品の表の口縁部と同じくせをもつ。(13)は胴部があまり張らないらしい。口唇部は平坦をなす。ともに褐色。(14)は復原口径17.8cmをはかる。(15)は胴部はほとんど張らない。細長い胴部をもつと思われる。褐色をなし、復原口径20.0cmをはかる。

(1)、(2)は小形品で製作にあたっては塊りから、手にだけによって、整形し調整している。

(1)は砲弾形をなす。内面の整形は完全でなく余分の粘土はそのまま残している。復原口径3.8cm器高 5.2cmをはかる。(2)は壺を模したものであろうか。胴部の上端を指でおさえ外反させて口縁部としている。内面にはなで跡がみられる。口縁径 6.4cm、器高 6.4cmをはかる。双方とも実用の土器とは考えられない。

表2 ふいご羽口出土表

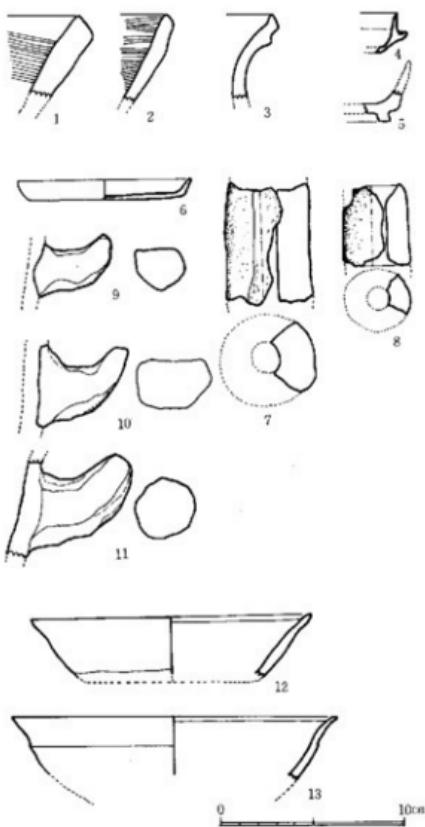
区	層位	個体
A 22	4	1
A 23	4	2
A 24	4	2
A 40	5	1
B 4	4 (溝内)	3
総計		9

III 歴史時代の遺物（第19図）

第19図の中には、古墳時代の遺物も含まれているが、便宜上ここで一括してのべる。

(1)、(2)はすり鉢の口縁部である。破片ではあるがかなりの大形品であるように思われる。沈線はあまり深くない。外面青灰色、内面黄褐色をなす。(3)、(4)、(5)は須恵器。(3)は壺の口縁部。(4)、(5)は、壺の破片。(4)の形のものは後期古墳の副葬品として出土することもある。(6)は土師質の皿。底面には板目様の圧痕と、いわゆる糸切り痕があられる。口径17.4cmをはかる。

暗灰色をなし、焼成はよい。(9)～(11)は把手部。断面形が橈円形のものがある。



(7)、(8)は、ふいごの羽口の破片。ふいご羽口の出土数は第2表のとおりである。ほとんどが少破片であり、旧状は知りがたいものが多い。(7)は出土品の中で大形で、外径4.8cm 内径1.7cmをはかる。(8)は先端にちかい部分の破片。外径3.6cm、内径1.2cmをはかる。径の大小にかかわらず、ともに赤変し、ガラス質化している部分がある。

出土陶器は、中国製の青磁、青白磁と日本製の中世～近世陶器である。うちわけは ①口はげをもつものの4片 ②珠光青磁 1片 ③竜泉窯の青磁 19片 ④日本製のもの10片である。いずれも小破片である。⑩はいわゆる「口はげ」をもつ青白磁の碗である。

歴史時代の遺物としては、他に石塙の小破片、布目瓦の小破片が出土した。また製鉄を示すものであるスラッグ、炉壁の破片が2個出土した。

・第19図 古墳・歴史時代の遺物

IV 小 結

牟多田遺跡の出土遺物は、上記のように小破片が多く全体をうかがい知ることができるものは少數であった。各時期ごとの遺物の内容を整理する。

牟多田遺跡で出土した最古期の遺物は、夜臼・板付I式土器である。口縁部破片が16個であるから、個体数としては少量である。突帯の形状よりみれば、板付遺跡で抽出された夜臼式土器の甕A、Cに相当するものであろう。しかし口縁部に二条の突帯をもつものは、この期には例をみない。板付IIの細分されたとして流通している、いわゆる「亀ノ甲タイプ」には、甕の口縁部に二段の突帯をもつものはあるが、牟多田遺跡のものは明らかに突帯の形状やつくりを異にしている。この時期決定は今後の資料の追加をまたなければならない。

夜臼式、高環形土器の脚部の出土は知られている資料に新例を加えた点で有意義であった。⁽¹⁾ すなわち、板付遺跡の全出土土器、約3万個のうち、夜臼式土器の脚部はわずか約10個にすぎないのである。牟多田出土の高環形土器の脚部は低く、従来知られているものに比べると、ややすんぐりした感じがする。

出土土器片のうち、数的には夜臼式が多かったが、一片ではあるが板付I式の甕形土器破片も出土し、両者が共伴するのは福岡平野のこの期の他遺跡例と同様である。早良平野でのこの期の資料は有川遺跡⁽²⁾で良好な資料が知られているのをはじめ、近年調査の湯納遺跡、鶴町遺跡⁽³⁾下山門遺跡⁽⁴⁾でも出土している。ただし、牟多田遺跡出土のものは、量も少なく、ここには包含層は存在しないと思われる。生活地は、牟多田遺跡より南西部にあたる扇状地の先端の微高地一帯を最有力地として考えうる。弥生時代の遺物は総数11点にすぎず、他地からの流転と考えられるが、投擲形土製品の新例を加えることができた。

牟多田遺跡の中心遺物は、溝内より出土した土師器である。出土場所は、必らずしも溝内のみではなく、第4、5層での出土はあったが、微小破片であり、この層がとくに包含層とはみられない。溝内のものは先述のように、流れ込みのものとみられるものもある。しかし大半は溝に伴なうとみられるものである。だが、土器があるために溝の水の流れが困難をきたすという量ではない。

さて、溝内出土土師器は須恵器を伴なってはいないので、古式であることは、まず考えられよう。器種は、甕、壺が中心である。壺は二重口縁と小形丸底をなすもので、時期を限定できる資料である。甕は、上端部で肥大するやや内反した口縁部をもち、外面に細い刷毛目をもつ。

これらの器種は、出土地が溝内の別々の地点であっても類似した形状の少破片が多く同期の組み合わせの可能性があるものである。ここでは溝Iの底面より出土した甕および小形丸底壺の完形品を手がかりとして時期決定をすすめよう。

早良平野での土師器の編年は、現在まで2ヶ所で編年案が提示されている。平野の中央部、

独立洪積台地上の有田遺跡では、弥生前期初頭の溝、古墳時代の竪穴住居址、溝、奈良時代の竪穴などが調査され、資料の主体をなす古式土師器を2期にわけ、それぞれが示す文化期を有田Ⅰ期、Ⅱ期とよばれる。⁽⁷⁾一方平野の西山麓宮の前（A～D地点）遺跡では、弥生終末から古墳時代初頭の竪穴住居址、北部九州特有の墓制をのこす古式古墳が調査され、弥生終末から古墳時代の土器を3類に分類し、それぞれを宮の前Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式と仮称した。⁽⁸⁾

両掲年の立論の根拠はここでは述べないが、両遺跡の土器の形式的な関係は次のように理解してよかろう。

（弥生最終末期）宮ノ前Ⅰ式→（宮ノ前Ⅱ式）→（土師器最古期）宮ノ前Ⅲ式→（　　）
→有田Ⅰ期→有田Ⅱ期

ただし、この場合宮ノ前Ⅱ式は資料が少量なこともあって形式としては、宮ノ前Ⅲ式に含まれる可能性もあるとされる。また有田Ⅱ期は一部、Ⅰ期に重複するとされる。他地方との関係については、有田Ⅰ期の時期を関東の五領式より新らしく和泉式に接近した時期、有田Ⅱ期は和泉式の前半とされた。さらにその後調査された筑後の弥生終末から古式土師器の良好な資料を出土した孤塚遺跡の総括では有田Ⅰを、関西の布留式と対比する案が示された。以上のような有田Ⅰ期の位置づけが正しいとすれば、有田Ⅰ期の年代は、畿内の古式古墳中出土をみる石製壙が、布留式の器種中に小形丸底壺として存在することから逆類推した布留式の年代、すなわち4世紀後半～5世紀初頭に位置づけることが可能であると考える。

以上の年代観を前提として、牟多田遺跡の遺物をみていくと、小形丸底壺は、宮の前Ⅲ式には未登場であるが、有田遺跡では16区などにみられる。これは、胴部の張り具合などに若干の差異をもつが、牟多田遺跡のA22区溝9（第18図6、9）などに類似する。A6区溝I出土の小形丸底壺（第17図2）はより形態がととのう。近い遺跡では福岡市西区今宿の若八幡宮古墳くびれ部から出土したものに類似し、島根県松本一号墳などにも類例を求まることができる。西日本では各地でみられる定形化した器種であるといえよう。

さらに甕についてみると、共通する特徴を整理すれば、①口唇部の肥大してやや内湾するくせ ②胴部内面の全部分におよぶへら削り ③器面に細く、浅い刷毛目をもつ ④器壁が非常にうすい ⑤最大径が胴部のほぼ中央部にくるなどの諸点があげられる。さらにこの種の甕には肩部に1本の沈線をもつものの存在することが、B2区第2溝出土（第16図2）の甕よりわかる。

早良平野での、この種の甕の出土は、有田遺跡のなかにはかなりの数をみいだすことができる。しかし、非常に薄手のため完形品の出土はなく全体の形状は不明であったが、最近の拾六町湯納遺跡、野方中原遺跡の調査で多量の良好な資料が出土した。野方中原遺跡では、住居址から出土する甕のなかに、牟多田遺跡のものに類似する資料が多量含まれている。口縁部が肥大するくせ、胴部内面のへら削り、器面の細く浅い刷毛目、肩部に1～3本のくずれた沈線を

めぐらすものがある、などの諸点は同様にみられる。しかし口唇部が水平で端正なこと、最大径が肩部にくること、などの違いもある。さらに完形品の1例には平底気味の丸底のものもあり、これは器高28.4cmをはかり容量の点でも違いがある。この中原遺跡出土の甕は形式上先行する時期のものと考えられ、この種の甕には、時間的巾があると考える。一方有田II期にみられる甕は、口縁部が直延する定形化したくの字口縁であり、この種の甕は含まないので、この甕の形式を有田I期、あるいはそれにやや先行する時期のものとみることができよう。

この推定が正しければ、甕の時期も4世紀後半(あるいは若干逆上する可能性もありうるのだが)から5世紀初頭に位置づけることが可能であろう。牟多田遺跡の土師器の年代を正しく位置づけるためには、資料不足の感はまぬがれないが以上のように憶測しておく。

土師器以外に、古墳時代に属する遺物として須恵器などの少量の破片があるが、これは近位置から流転したものである。布目瓦にも注意しなければならない。

製鉄関係の遺物の出土は量としては必ずしも多くはないが、周辺で確実に鉄生産がおこなわれたことを裏付ける遺物である。時期については明確にしがたいが、近世のものではないであろう。このように、出土遺物の各時期のもののうち、古式土師器は溝に伴なうものであるが、その他は他の場所からの拠散したものだと考える。しかし、スラッグや布目瓦などが、そう遠くまで流れるものでないとすれば、これらの遺物の使用法から推定できる製鉄址、建物などのもともとの場所は、コンタが一段高くなる現在の野方の集落を含む、扇状地末端微高地一帯が有力候補地とみられる。そこには、遺跡の下層や溝の中にみられた、夜臼・板付期の生活址(包含層)も存在する可能性が大きいといえよう。

註

- (1) 森貞次郎・岡崎敏「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961
- (2) 註(1)に同じ
- (3) 九州大学文学部考古学研究室編『有田遺跡』福岡市教育委員会 1968
- (4) 1971~1973年 福岡県教育委員会調査 栗原和彦氏より教示。
- (5) 1973~1974年 福岡市教育委員会調査 力武卓治氏より教示。
- (6) 山崎純男編『下山門遺跡』福岡市教育委員会 1973
- (7) 小田富士雄「有田遺跡の土師器とその性格」『有田遺跡』所収 福岡市教育委員会 1968
- (8) 下條信行「土器総年について」『宮の前遺跡(A~D地点)』所収 福岡県労働者住宅生活協同組合 1971
- (9) 柳田康雄「若八幡宮古墳『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第2集 福岡県教育委員会 1971
- (10) 山本清「遺物」『松本古墳調査報告』島根県教育委員会 1963

6 筑前国早良郡家について

律令時代における早良郡の成立がいつであったかは明らかでないが、西隣に怡上郡、東隣に那珂郡が位置していたのである。そして、この二郡は『魏志倭人伝』にしるされた伊都國、奴國⁽¹⁾、あるいは『日本書紀』にしるされた伊觀原、備縣を中心にして、それぞれ律令時代になつてから郡に編成されたことは間違いないだろう。また、この二郡には考古学の成果によって、弥生時代において怡土・那珂の地域には有力な首長の存在が知られるのである。さらに古墳時代における前方後円墳も多く発見されているのである。⁽²⁾

これに対して、早良平野における弥生遺跡の分布は海岸の砂丘地帯の内側、山麓の丘陵地帯、扇状地の扇端、洪積台地にみられるが、室見川流域の沖積地は低平多湿地帯で、水田開発も十分行なわれていなかったと思われる。従って、この地域に有力な首長を中心とする共同体組織が十分行なわれなかつたのであろう。さらに早良地域が怡土・那珂二地域の中間地帯にあって自立性が非常に弱くなることも考慮しなければならないだろう。有力な首長の発展を欠いたために、早良郡には径20m以上の大形円墳はみられるが、前方後円墳は一基も知らないのである。⁽³⁾

早良郡の郡名であるサワラはセフリ、シウリ、ソールなどに通じ、がんらい朝鮮語で「大きな集落」を意味し、朝鮮との関係が考えられる。『日本書紀』神功皇后5年春3月癸卯朔己酉条に「(前略)乃詣₂新羅₁。次₂于距轄津₁。抜₂草羅城₁、遷之。(後略)」とあり、古代族長層の一人で武内宿祢の子である葛城襲津彦が慶尚南道梁山の地にある草羅城を抜いて帰ってきたのである。この草羅と早良が同じ読みかたであることに興味がもたれる。ところが、『日本書紀』応神天皇9年夏4月条に「遣₂武内宿祢於筑紫₁。以監₂察百姓₁。(中略)於是有₂壹伎直祖真根子者₁。(後略)」とあり、この文中にしるされた壹伎直祖真根子を祭祀する壹岐神社が条里地割の末端近くである下山門にあることに注目しておきたい。『倭名類聚抄』早良郡条の郷名のなかに「早良・平群・曾我」があり、早良臣・平群臣・蘇我臣の祖は武内宿祢であったとする『新撰姓氏錄』・『三代史錄』の内容から考えて、早良地域は武内宿祢との関係が深かつたと推測される。このことは博多湾にめんする早良地域は大陸渡航にも便利な地域であったが、周辺に比較して開発が遅れていたために、4世紀末から5世紀にかけて朝鮮に渡った葛城襲津彦が多く帰化人を連れて帰り、この地に居住させて開発を進め、早くから大陸との往来に従事していた壹岐氏が彼等を統率していたのであろう。そして6世紀に起った筑紫君磐井の乱後、中央勢力が比較的在地豪族の発展に乏しかった早良地域を北九州沿岸における勢力浸透の大きな拠点にしたことが『倭名類聚抄』早良郡条の郷名である「田部・平群・額田・曾我」から判断されるのである。さらに「毗伊鄉₂」があることから、肥後國八代郡肥伊鄉を出自にしたと思われる肥君が磐井の乱後を契機にして巧みに中央豪族に付隨して早良郡を始め、筑前国志麻郡、

(8) (9) (10)
肥前国豪父・松浦の二郡、薩摩国出水・薩摩の二郡と各地に進出して、律令時代、郡司になっていたことがわかるのである。

この早良平野の沖積地にもN10°Wの方位を有する条里が施行されているのである。条里の南北の基準線は筑肥線姪浜駅裏の五塔山から重留の坪塚（大形円墳）を経て背振山の峰への見通し線ではないかと思われるが、坪並が東北隅を1ノ坪、西北隅を36ノ坪とする連続式で、坪並の基準が海岸から山地に向っていることは、海岸に近い地域が早良郡の中心地ではなかったかと推測されるのである。条里地割の北限は十郎川から室見川にかけては大体海拔1.5m、室見川から桶井川にかけては地域によって異なるが、2ないし2.5mがその北限となっている。この北限に接する郷は現存する地名から考えて、室見川下流域左岸が額田郷、右岸が田部郷、海岸・砂丘に接する荒江付近が郡名を負う早良郷、桶井川下流域が毗伊郷に比定されるのである。そして、田部郷の遺称名を残す小田部から有田にかけての洪積台地上の集落を大化前代のある時期（おそらく磐井の乱後であろう）に田部に編入して、この地域の住民（帰化人も多かったと思われる）を皇室の直轄農民としてその支配下に置いて、この田部郷を中心とした早良地域の開発を積極的に進めたのではないかと推測される。

郡家の位置を知る手懸りとしては、地名（小字名も含む）・地籍図・古地図・残存景観・文献・姓名・神社・祠・伝承・遺跡・遺物等の多くが考えられる。これらの手懸りのなかで早良郡の場合、郡司又は郡司クラスの史料から郡家址を推定することが可能のようである。

『寧楽遺文』下巻天平宝字2年12月21日条の觀世音寺奴婢帳に「早良郡額田郷人夫戸主三家連息鳴戸口三家連豈継解 申稻代物進奴婢等事（後略）」、同じく天平宝字2年12月22日条に「主帳外小初位上平群部 摠大領外從七位下三宅連 在所賞金 摠少領无位早良勝在所弟子（後略）」同じく天平宝字3年8月5日条に「（前略）以前得部内早良郡司去7月22日解移、得部内額田郷戸主三家連豈継申状云（後略）」とあり、早良郡の摂大領であった三家連とその一族で郡司クラスの有力者と推測される三家連豈継が額田郷に居住し、摂少領であった帰化系の早良勝は早良郷、主帳であった平群部は平群郷に、それぞれ居住していたのではないかと思われる。これらの郡司又は郡司クラスの有力者の居住する額田・平群・早良の三郷のうち、額田郷に比定される大字拾六町に奈良時代と考えられる城ノ原廃守があり、都寺ではなかったかと考えられるのである。さらに『延喜式』卷28兵部省 西海道筑前国駿馬条に「額田駿」があり、この駿が早良郡の額田郷に比定されるのである。なお、前述した壱岐神社のある下山門も額田郷に比定され、壱岐神社から西方付近にかけては壱岐村になっていたのであるが、ここにト占を行う壱岐氏が居住していたことは間違いないだろう。また、額田部はそれぞれの本貫地より、田作り中心の農耕諸呪術を持って、世々の宮廷に奉仕した職業部族であった。このことは額田部と壱岐氏との間に祭祀行事を中心とした深い関係があったのではないかと考えると大変興味深い。以上のことから、おそらく郡の中心地は額田郷で、郡家は額田郷内にあって、額田駿も郡

家に接するか隣接していたのであろう。

そこで額田郷の遺称名を残す野方をはじめ、平群郷の遺称名を残す戸切等についての小字名を検討してみると、戸切の小字に「兵庫町（地積約4町・L点）」があることに注目すべきであろう。この「兵庫町」は軍団の兵庫ではなく、郡家の兵庫に由来するものと考えられ、この付近に郡家城が想定されそうである。そこで復原された条里の里界線を記入した第1図によって「兵庫町」付近をみると、東に6町の所に室見川、西北6町の所に野方がある。いま仮りに「兵庫町」の一角を含むA-B-C-Dの方6町域を郡家城と想定した場合、東端にあたるB-Dが室見川の旧河道に沿っていること、さらにB点からE点の十郎川に抜ける旧河道が現地調査や3千分ノ1地形図、小字名の「古川（E・F点）」「河原川（G点）」「古川田（H点）」「古川前（I点）」によって確認され、郡内最大の河川である室見川に沿い、しかも十郎川に抜ける好位置にあったことになる。なお、A点に近い野方の小字「休場（J点）」は額田駅家に由来するのではないかと推測され、その具体的な位置を比定することは困難であるが、官道が額田駅から二手に分れて怡土郡家付近で合流して比善駅に達したものと思われる。その一つは野方から今宿・周船寺（おそらく大宰府の主船司が置かれた所）・高来寺を経るルート、他の一つは戸切の小字に「大道端（K点）」があり、しかも「大道端」に沿う南北の道路が周辺では比較的直線であることから、おそらくU-Wを通り、日向岬を経るルート、であったと思われる。これらのこと考慮すれば、額田駅家はS-T-U-Vの方2町ではなかったかと臆測される。従って、額田駅から次の右瀬駅に向う官道はU点から早良郡家の北端であるA-Bを通じて室見川を渡り、条里の区画線を通じて樋井川の流域に出たものと思われる。

次に橋本の小字に「警固（M点）」があることに興味がもたれる。この「警固」は地積1町強であるが、官道や郡家に近い位置にあることに注目したい。室見川から十郎川に抜ける旧河道に沿うことから、河川交通によって博多湾に出入りする船の監視を中心にして、官道や郡家の警固を行っていたのであろう。警固を戒める史料が大宰府管内に多いが、そのはじめは『続日本紀』宝龟11年7月丁丑条に「勅。安不レ志レ危。古今通典。宜下仰。縁海諸國。勤令申警固上。其因幡。伯耆。出雲。石見。安芸。周防。長門等國。一依。天平4年節度使從三位多治比真人守等時式。勤以警固焉。又大宰宜レ依。同年節度使從三位藤原朝臣宇合時式。』とある天平4年かもしれない。早良郡の西隣である怡土郡には大宰府の西北の守りである怡土城が設けられていたことから、その東の防衛的な意味もあって、早良郡家に近いこの「警固」の地で閑剣に類する役割をはたしていたのであろう。以上のことからA-B-C-Dの方6町域を早良郡家域と推定するのに無理がないと思われる。

額田郷と平群郷の境界は明らかでないが、旧村境から考えてO-Pを結ぶ条里の区画線が郷境ではなかったかと推測され、郡家域は二郷にまたがっていた可能性が強い。なお、「警固」の西北にある小字「倉道（Q点）」は額田郷倉に由来するのかもしれないが、福重の小字「樋木

(B点)」にも注目しておきたい。

郡司居住集落が郡家に対してどのような位置に存在していたのか明らかでないが、擬少領であった早良勝弟子をはじめ、擬大領であった三宅連黄金も郡家域に近い額田郷内に居住していて、日々郡家に通勤していたとも考えられる。

『日本紀略』延喜16年8月22日甲辰条に「大宰府言上。筑前国早良郡司今月8日解云。於郡司三宅春則宅。今月3日未刻。牛生レ體。頭両分。胸腹合体。前足有レ四。後脚有レ四。岡其形体。言上者。府令。ト笠。」とあり、早良郡司に三宅春則がなっていたことがわかる。カバネがないが、おそらく「連」であったことは間違いないだろう。天平宝字3年から延喜16年までの郡司の動向は明らかでないが、大化前代において諸国の屯倉を代々管掌したと思われる三宅連が累代の郡司であった可能性が強い。また、郡司になっていたか否か明らかでないが、郡司クラスの有力者として毗伊郷には肥君又は肥直、額田郷には壱岐直・額田郡連などの有力者がいたことも確かであろう。

早良郡内に居住していた部としては郷名から額田部・曾我部・田部・平群部・早良部が、地名の入部から壬生部が、鳥飼から鳥養部が居住していたことが考えられる。

註

- (1) 仲良天皇9年9月庚午朔己卯条
- (2) 仲良天皇8年春正月己亥条
- (3) 「古代の日本」3九州 角川書店 27-89頁 昭和45年
- (4) 「有田遺跡」有田遺跡調査団 昭和43年 50頁
- (5) ○平群朝臣 石川朝臣同氏。武内宿祢男平群都久宿祢之後世。日本紀合。
○早良臣 平群朝臣同祖。武内宿祢男平群都久宿祢之後世。
- (6) 元慶元年12月27日癸巳条に「右京人前長門守從五位下石川朝臣木村。歿位正六位上箭口朝臣
岑家。改。石川箭口。並賜。姓宗岳朝臣。木村官。始祖武内宿祢男宗我石川。(後略)」
- (7) ○「大宝2年筑前国鴨郡川辺里戸籍」に大領肥君猪手がしるされている。
○「平安遺文」第1巻67に大領肥公五百磨がしるされている。
- (8) 「統日本後記」臺祥元年8月壬辰条に「肥前国養父郡人大宰少典從八位上筑紫公火公貞直。
(後略)」とある。
- (9) 「日本蓋界記」下巻第35に「白壁天皇之世 筑紫肥前国松浦郡人 火君之氏(後略)」とある。
- (10) 天平8年「薩摩國正税帳」に「大領外正六位下兼七等肥君」とあり、出水郡の郡司と推定される。
- (11) 天平8年「薩摩國正税帳」に薩摩郡の郡司として「主帳外少初位上兼十二等肥君廣龜」とある。
- (12) 摂著「筑前国早良郡の条里」史学研究第99号 23-32頁 昭和42年
- (13) 前掲(4) 47頁

- (14) 石上堅『新・古代研究』第三 59-71頁 雪華社 昭和47年
- (15) 伏見駅家に推測される轟穂郡筑穂町大字馬敷の小字に「休場」¹³³がある。
- (16) 抜者「筑前国怡土、志麻郡における古代の歴史地理学的研究」佐賀大学教育学部研究論文集 第20集 昭和47年
- (17) ○『続日本紀』天平勝宝8年6月甲辰条に「始築₂怡土城₁。令₂大宰大武吉備朝臣直備等₂当其事₁焉。」
○『続日本紀』神曇景雲2年2月癸卯条に「筑前国怡土城成。」
- (18) 竹内理三「那術の構造」史測50号 68頁 昭和26年
- (19) 『寧樂遺文』下巻天平宝字3年8月5日条に「(前略) 史生額田部連君万呂 (後略)」とある額田部連君万呂はこの額田郷を出自としていたのであろう。

7 ま　と　め

牟多田遺跡の発掘調査では、主に古墳時代前半期の溝と、杭列を検出した。北九州地方のこの期の低湿地に位置する遺跡の調査は、近年、大規模な造成に伴ないようやくはじまつばかりであるが、当初の予測を上まわる遺構・遺物が検出され、古代以来のこの地の土地空間の高度の利用を裏づけた。

さて、牟多田遺跡の4世紀後半～5世紀とみられる溝と杭列の例は、直接対比できるような報告がなく、同時代遺跡のなかでの検討は今後の課題として残されているが、早良平野の各期の遺跡分布からみた弥生時代以降の生産地としての土地開発の発展を図式化すれば次のようにみられよう。

- I. ラグーンを抱く地帯の初期農業期
- II. I段階の面的拡大(=谷水田)期
- III. 沖積地への進出期
- IV. 沖積地の積極的使用期
- V. 生産地から宅地への変遷期

この場合、生産地とともに、各期の日常生活をおこなった土地が判明し、生活地と生産地を同時に考察しなければ、時代変遷の質を示す土地占地の多様な変化をつかむには充分とはいえない。その点では早良平野の考古学的調査は未だ十分でないが、生産地の変遷のなかにも、また生活地本体の動向が含まれているものと考え、この問題にふれてみる。

I. ラグーンを抱く地帯の初期農業期

この期は原則として、弥生時代前期が相当しよう。既に知られているように、弥生初頭の遺跡は、平野の先端部の古砂丘上に立地する。とくに早良平野の北西海岸の藤崎遺跡などは著明であり、初期農業が砂地という地力の劣ったところではじまつることは、土地に対する一定の働きかけが未熟な生産体系であったことを裏付ける。有田遺跡も独立洪積台地上に立地するとはいえ、生産地としてはラグーン化した低湿地周辺が求められたであろう。この期の、早良平野内に拡がっていたとみられるラグーンの範囲を正確につかむには、ボーリング等による正式な地質調査をまたねばならないが、普通いわれているごとく標高5mを一応のラグーンの外縁線とすればこの期の早良平野の景観は小戸の妙見崎と生の松原の砂丘、および愛宕山と百道松原の砂丘地帯を済入口として城の原～拾六町～小田部～荒江を結ぶ広大なラグーンが想起される。この場合、牟多田遺跡一帯もラグーンの南奥部に位置することとなり、先述したこの期の一般的立地を示すものである。最近調査の拾六町湯納遺跡からも良好な夜臼・板付期の資料が出土しており、下山門遺跡からも数片ではあるが同期の資料が得られ、早良平野の初期農業期

の生産地がかなりの広範域にわたっていたことが知られる。一方、平野の南半の扇状地ではこの期の遺跡は知られていない。はたして存在しないのか、するのかを論ずるにはあまりにも基礎資料に乏しいが、もし前者であれば、早良平野の夜臼・板付期の伝播・定着について示唆的な事実となるのであるが、それは今後の課題である。

II. 谷水田期

この期は、原則として弥生時代中～後期が相当しよう。この期の遺跡の平面分布は、ほぼこの期の生産体系が適応できるすべての定住可耕地にみられる。平野の西北丘陵部の谷あいが生産地として利用されたのであろう。平野の東側、平尾丘陵上にのる宝台遺跡（弥生時代中期）では集落の前面に拡がる駄ヶ原川流域の狭隘な平地が生産地として想定された。このような姿は当時に早良平野の西山麓部の集落でも同様であったろう。一方、宝台遺跡は生産地の狭隘性の由、集落規模の無制限の拡張は不可能であると考察されたが、この事実は背後に拡大した冲積地をもちらながらもそれを積極的に開発する技術大系（および労働大系）をもたない早良平野各所の集落にも基本的にあてはまると思う。ここに広大な早良平野が存在しつつも糸島平野におけるような強力な政治権力の現出しなかった理由の一端があると思うのである。したがってこの期の早良平野の広大な冲積面も、本源的な富の産出地として意識されていなかったのであろう。既に指摘のように、このような谷水田（ここでは冲積面を生産地としない、という広義の意味で用いる）がこの期の一般的な生産地であるとすれば、当然水系を共有する集落間には水利権、灌漑権による利害関係が生じてくる。この問題が、仮に同一小河川を共有する村落間の平面的結合という形で解釈されるのか、あるいは小河川に対する徹底的な技術改変により解決されるのか、現在までの資料では不明である。しかし何よりも、この期の上記の実態を把握するためには、早良平野に流れだす、幾多の小河川流域の目的意識的踏査が必要であろう。いずれにしろ、この期の谷あいに求められた生産地は、集落ごとの密接な共同関係を形成せずにはおらない。

III. 沖積地への進出期

牟多田遺跡にみられた溝は、この期の特質をよく示していると思う。古墳時代初頭期～中期が相当する。すなわちこの期は、前段階の土地に対する、技術的・政治的な関係を基礎として初めて早良平野冲積面への進出が試みられるのである。これを可能にしたのは、技術的にはまず生産用具の質的変化、稲作技術の安定、共同体間の交通の拡大、それに伴なう共同体内外労働組織の強化などが窺われる。牟多田遺跡で検出した溝や「しがらみ」程度のものであれば、具体的には家族単位の労働でも作成が可能であるが、水利権自体は依然として共同体に帰すべきものとしてあるので、恐らく家族単位の労働でも、その生産物は直接当時者に帰すべきもの

とはされていまい。一方、ほは牟多田遺跡と同期の遺跡とみられる鶴町遺跡では、自然河道に大規模な枕を打ち込んだ遺構が発見された。巾2m長さ約20m以上にわたって高さ1.5m前後の自然木を約200本打ち込んでいる。発掘区を拡大すれば、さらに数は増大しそう。すなわち、ここでは、牟多田遺跡とは逆の共同体による灌漑整備がみられるのである。いずれにしろ、この期は、生産地がはじめて早良平野の沖積面に進出したのであるが、まだそれは牟多田遺跡が示すように山麓辺の沖積面にすぎない。

IV. 沖積地の積極的使用期

この期は、条里地割の平野内への施行として完成する。早良平野の条里が旧都内に单一の方向を示し、なおかつ条里の先端部下山門遺跡では、それが古代のものであることが知られた。すなわち条里施行の具体的な過程は明らかにしないまでも、ほは奈良時代までには沖積面は、室見川の一部の氾濫面を除いて生産地として利用されていたのであろう。このような生産地の所有者の形態は古代～中世を通じて変化はあったが、生産地としての平野面の開発は条里地割として古代に完成したのである。

V. 生産地から宅地への変遷期

これは現在が相当する。すなわち1970年代は、野方団地計画の大綱にそって、弥生時代以来約2000年間続いた早良平野の農地が、埋めたてられはじめた。計画によると1980年度の完成をめざして、野方地区を中心に入居者約3万人の大住宅地が形成される。

図版



1975・6 調査はじめ (西よりみる)



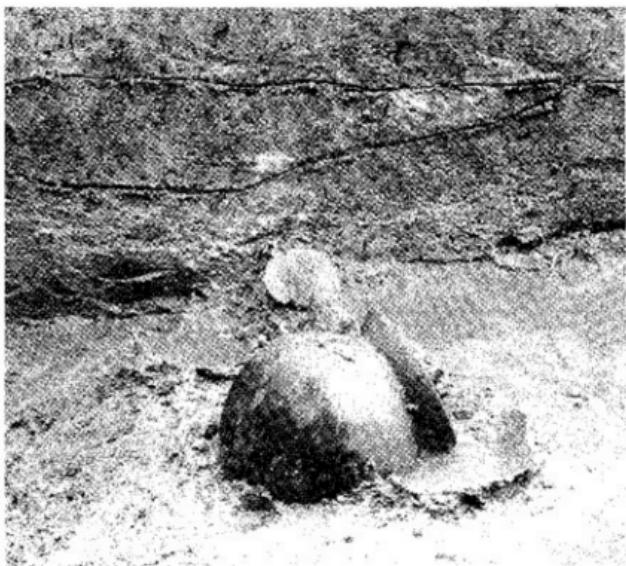
牟多田遺跡と間連遺跡 (A. 宮の前C地点 B. 湯納 C. 牟多田)
(D. 野方第1地点 E. 野方第2地点 F. 有田)



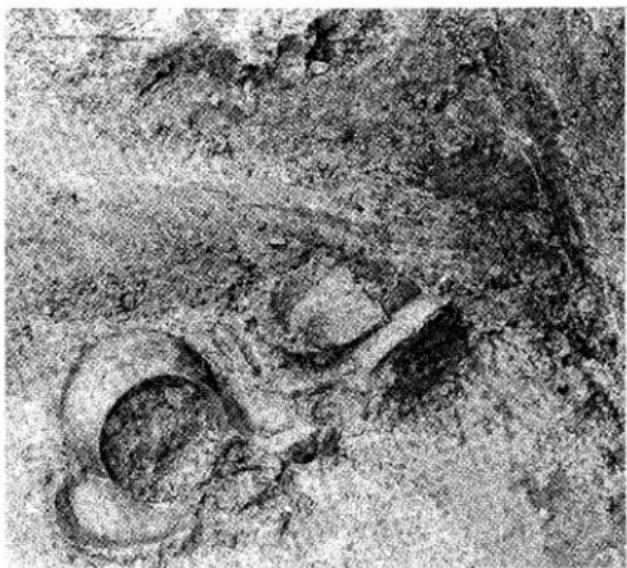
1. 溝I(A 6, 7区)と遺物出土状態(北よりみる)



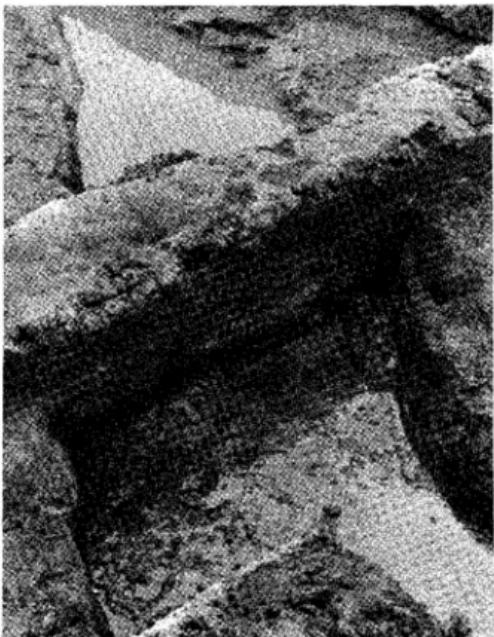
2. 溝I(A 6, 7区)と遺物出土状態(西よりみる)



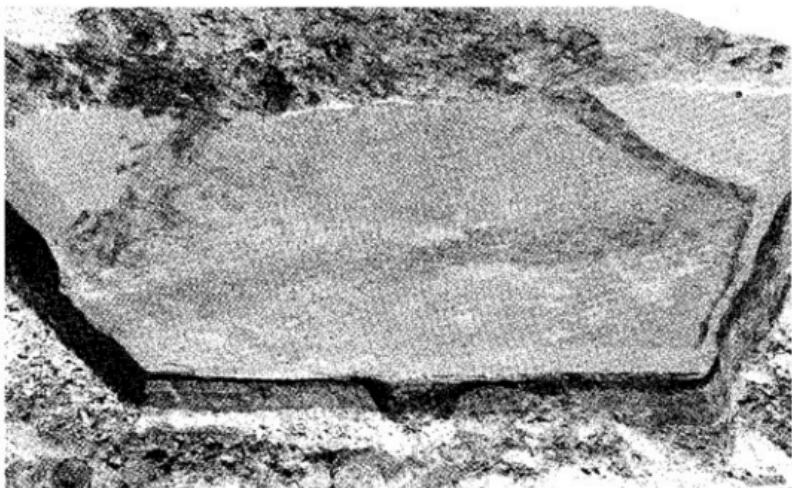
1. 溝1の断面と甕の出土状態（北よりみる）



2. 溝1の甕の出土状態



1. 溝5(B1, 2区)の出土状態(西よりみる)



2. 溝1, 溝4, 溝5(B2区)の出土状態(北よりみる)



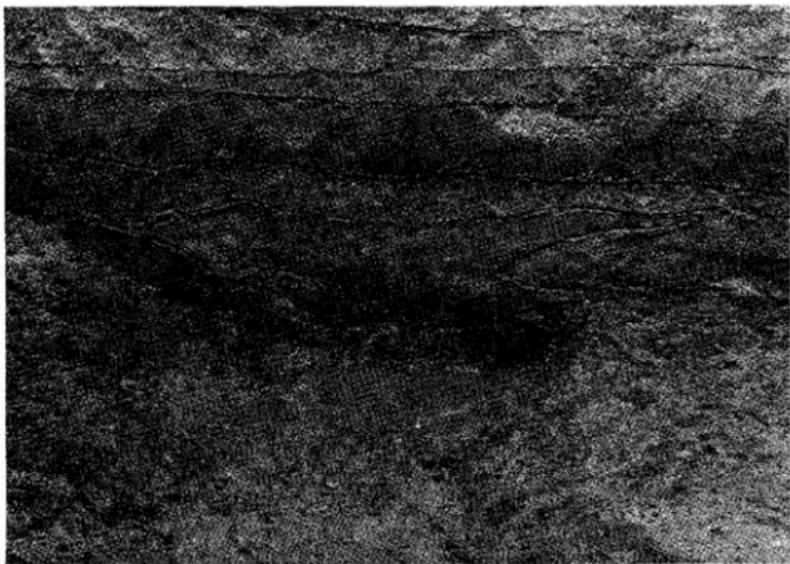
1. 溝5(B1区)の出土状態（北西方向の溝と南北方向の溝が合致している。）



2. 溝1と溝5(B1区)の出土状態（南よりみる）



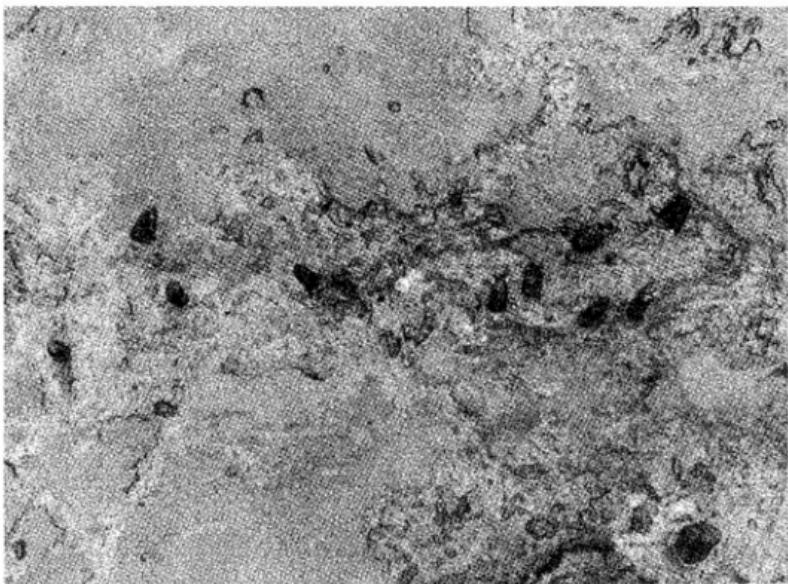
1. 溝9(A 22, 23区)と杭列の状態(南西よりみる)



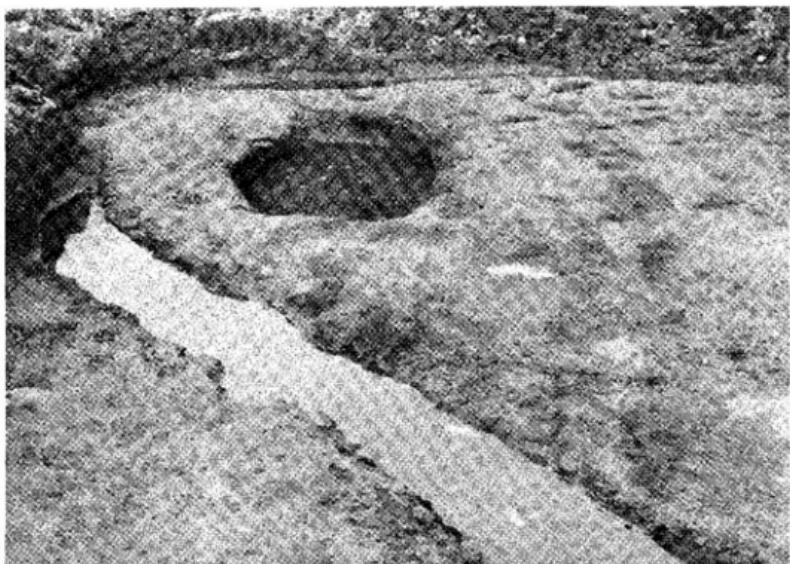
2. 溝9(A 23区)の断面



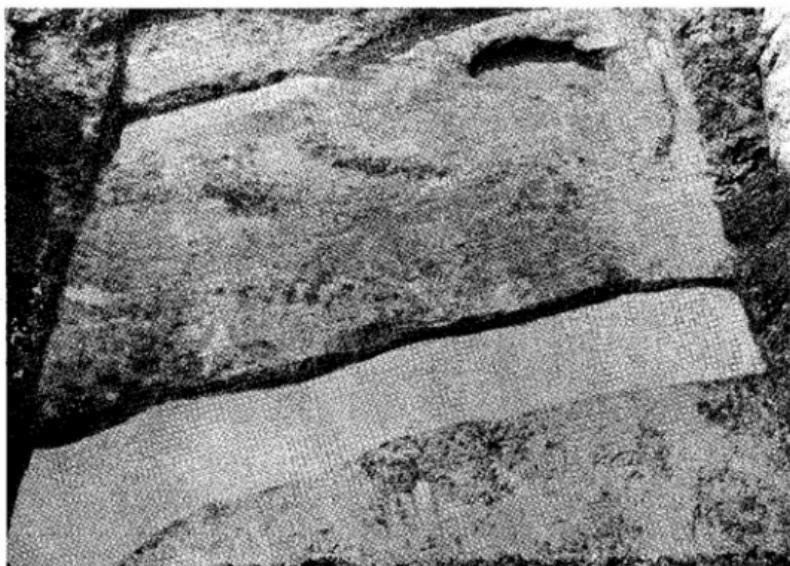
1. 杭列の出土状態（A22区）



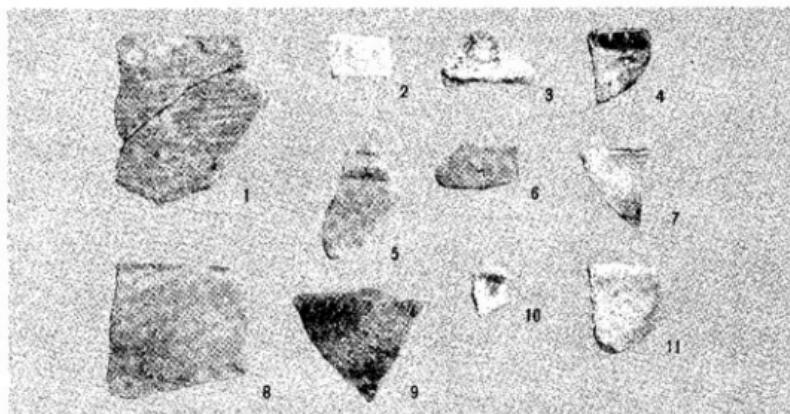
2. 杭列の出土状態（A22区）



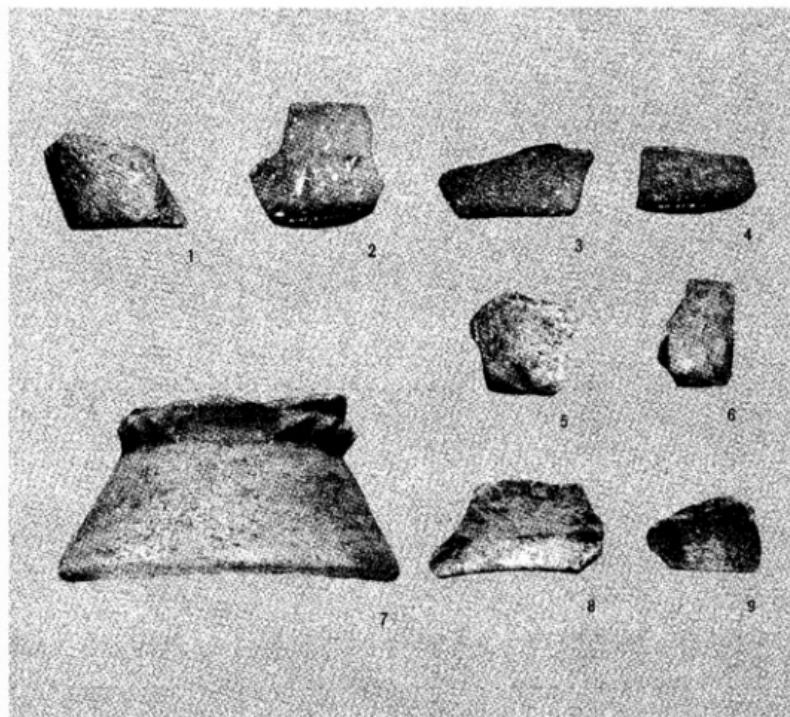
1. 溝9と穴(B 4区)の出土状態（西よりみる）



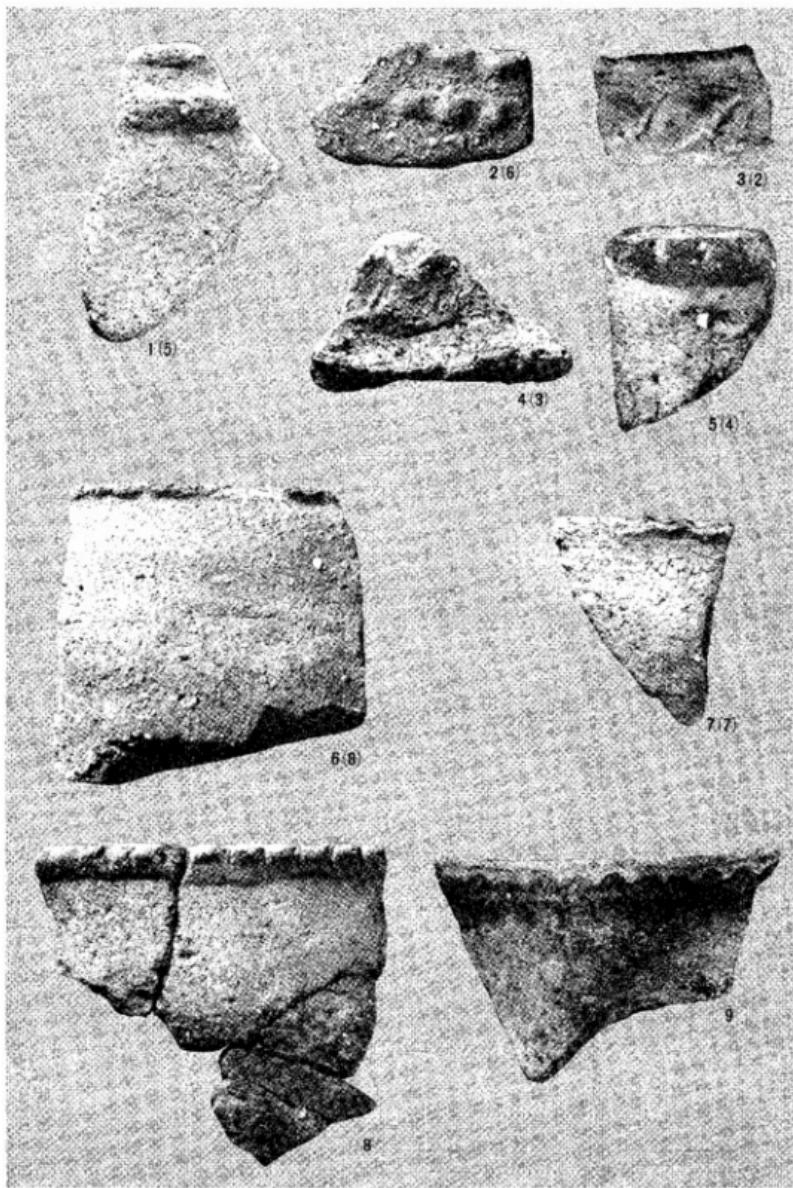
2. 溝9と溝10と穴(B 4区)の出土状態（南よりみる）



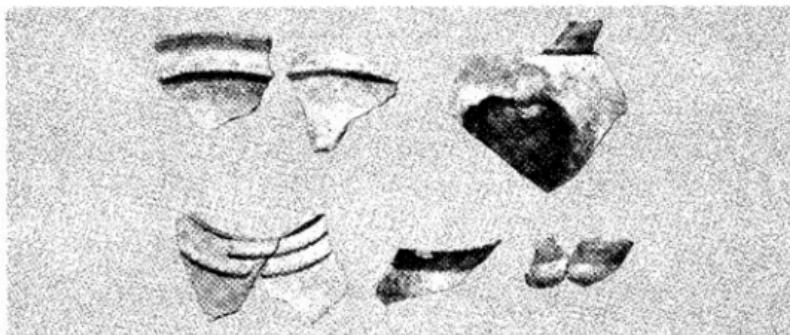
1. 夜臼・板付 I 式土器の口縁部と肩部 (11は壺形土器)



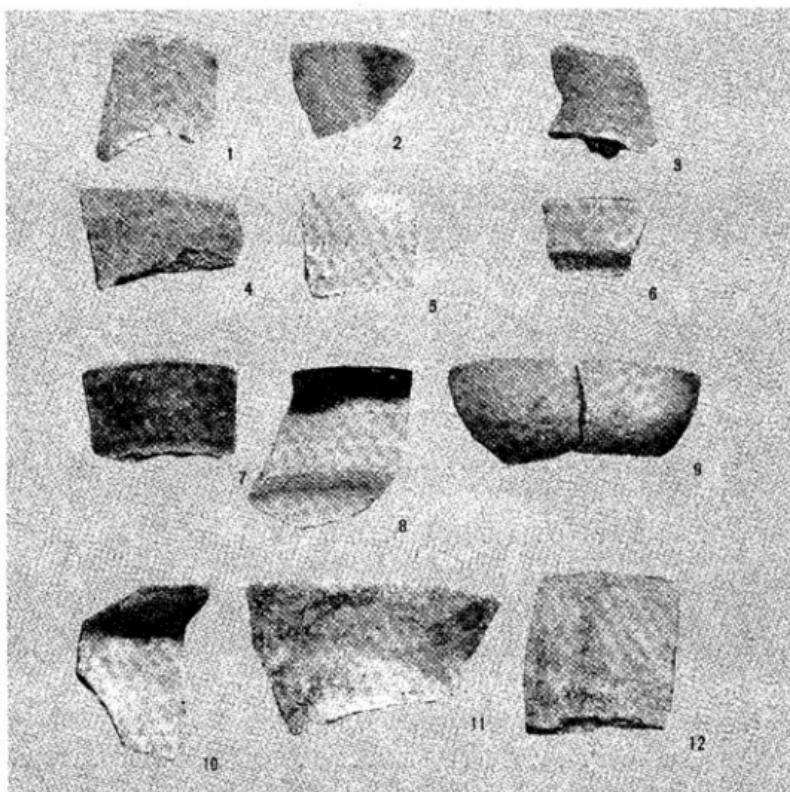
2. 夜臼・板付 I 式土器の底部 (7は高環形土器の颈部)



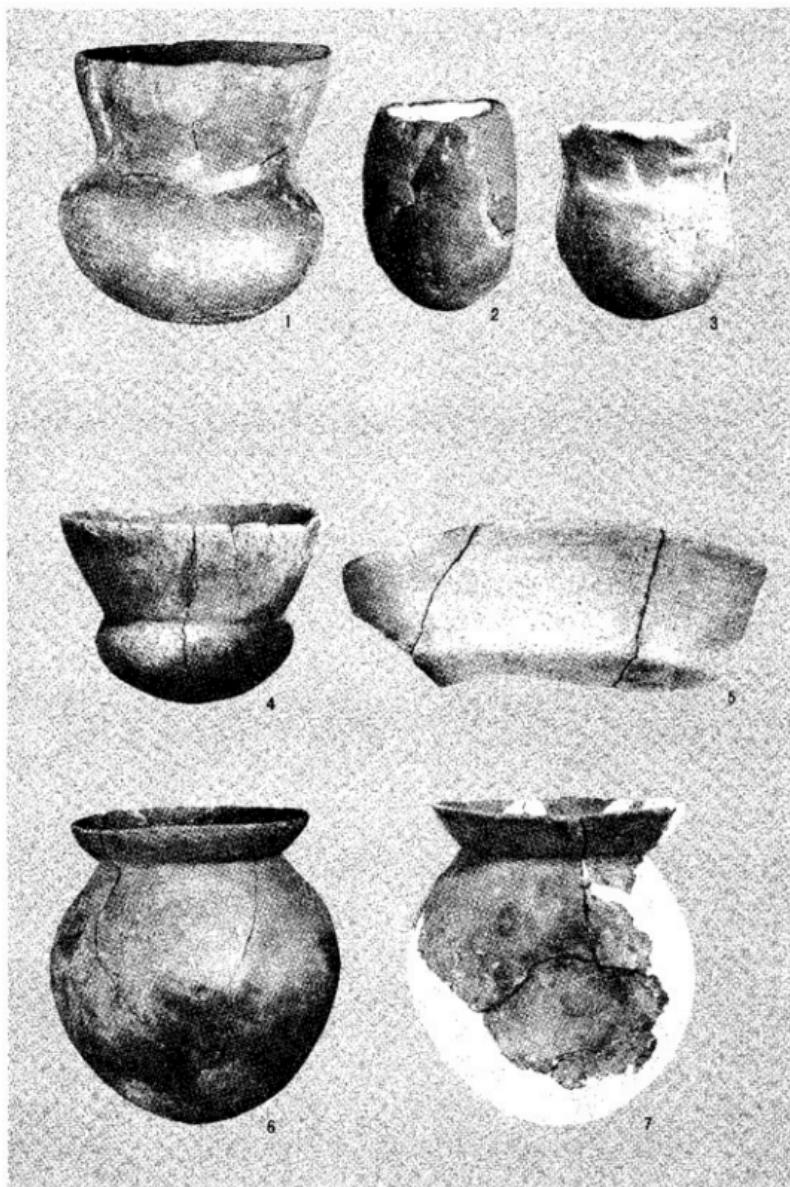
夜日式土器の口縁部 () は図版 9-1 に対応する [1~7 は分]



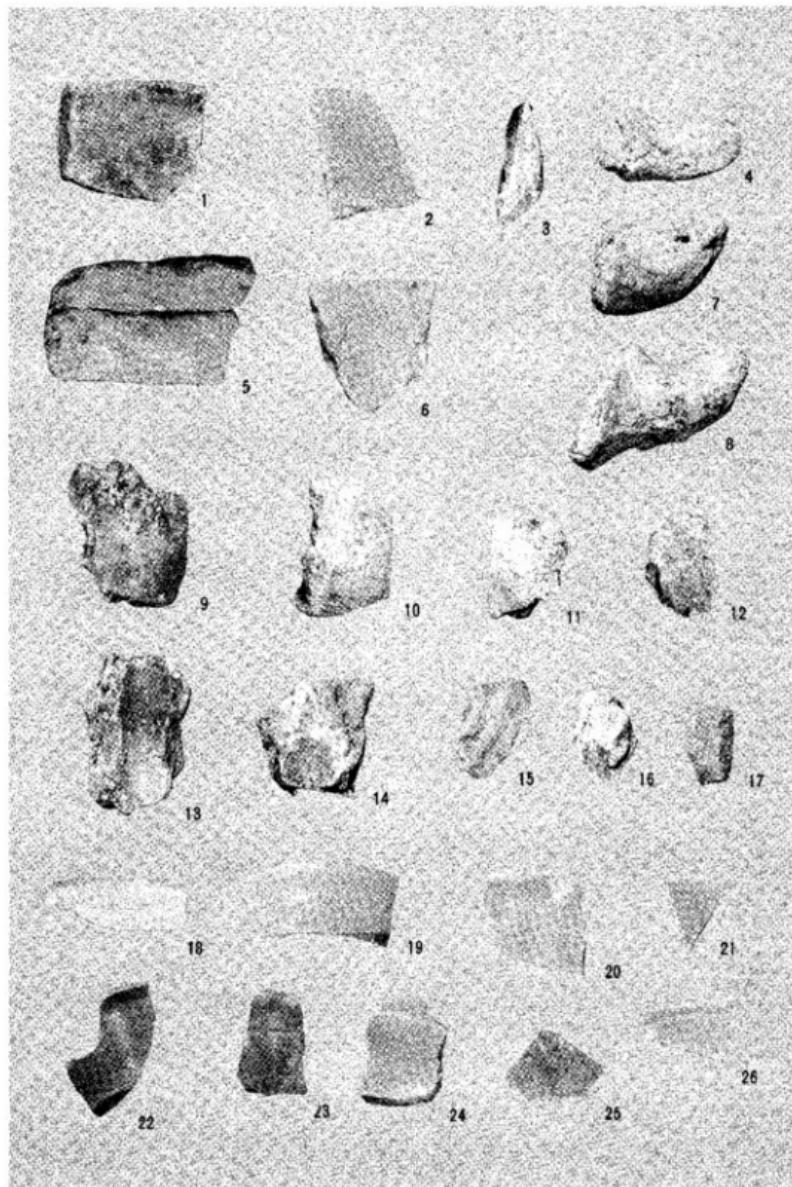
1. 溝5(B1, 2区)出土の土器



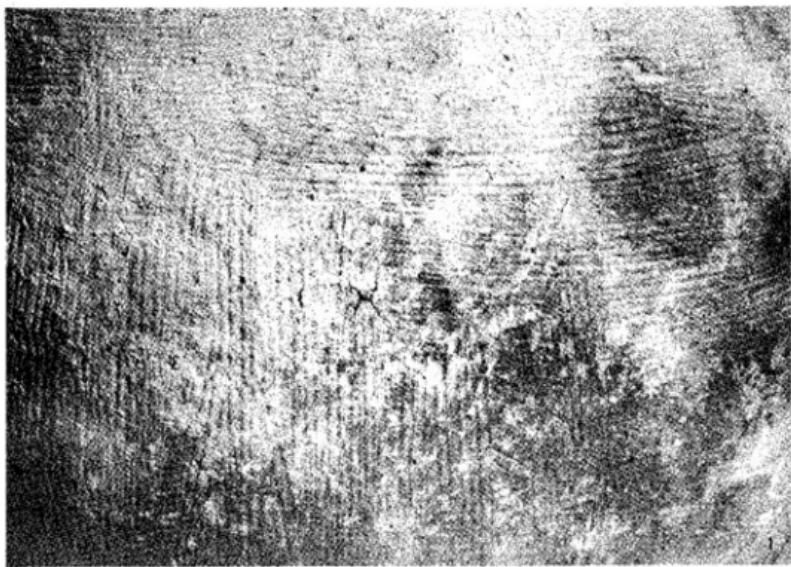
2. 溝9と竪穴出土の土器



溝Ⅰと溝6出土の土器（1～3は溝6、4～7は溝Ⅰ出土）



歴史時代の出土遺物 (1・2はすりばち, 3は石端, 5・6は布)
(9~17はよいご羽口, 18~26は磁器)



発の肩部の拡大写真（1は第18図4、2は第17図3の肩部）



野方中原遺跡の壺との対比（1～3は中原遺跡、4は牟多田遺跡出土）

調査関係者

福岡市教育委員会

教育長	正木利輔
次長	山崎義治
部長	結城一義
部長	石藏宏見
主任幹	青木崇
課長	清水義彦
課長	久我公一郎
埋蔵文化財 係長	三宅安吉
担当者	福田征一
用地課	
第1係長	中島正博
第2係長	今村進

福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集

牟多田遺跡

昭和49年3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神
印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1-8-34

522
3

[]

